

秋田美人の
秘密

獅子原
じゅべ

【第一部渤海編】

【 構成 】

【第一部 渤海編】

【第二部 現代編】

【第三部 燭光編】

【第四部 完結編】

【 奥付 】

【秋田美人の秘密 第一部 渤海編】

ある年の秋でした。ここは、海岸に面した村です。イツラワンと呼ばれる湾処（わんど）は、天然の良港になっていました。ちょうど、砂浜から磯浜に変化する場所です。湾処とは、入り江という意味です。

今日の海面はおだやかでした。10月の海は、荒れ狂うときもありましたが、遠くのマキグモ（入道雲）は、まだ生まれたばかりで今日の漁には、影響がないとカイは思いました。カイは一本釣りの漁師です。秋の日の出は、少し寒く毛皮の上衣が必需品でした。兄のセイジャがカイに渡します。

「カイよ。南東の空に小さなマキグモが見えるぞ。一荒れくるかもしれないな。」

「セイジャ兄、まだマキグモは、立っていない。バシーンヤが釣れたらすぐに戻ろうか。」



彼らは、小さな舟をこいで沖に向かいました。

舟の長さは、高麗尺で12尺（約4.2メートル）。沿岸で漁をするのには向いていましたが、とても外洋に向かえるような大きさではありません。それでも、彼らにとっては、とても大事な舟でした。父親のコウティから受け継いだものだったからです。

5年前の秋にコウティは、徴兵され戦死しました。その戦いの結果、震国（後の渤海）が建てられ、村には平和が訪れました。村人達は、戦死したもののたちの家族を共同で養いました。戦死者を称えたのです。

今、カイは、17歳。セイジャは、19歳。とても凛々しくたくましい青年に育ちました。もう村人からの助けはいりません。二人で家族を養えます。家では、母のアンニと妹のトウリヤ、幼い弟のキータイが待っています。

二人は、竹の竿とテグスそれに獣の骨を削って作った釣り針を持って舟に乗り込みました。テグスは、テグスサンという蛾の幼虫が出す絹糸腺から作られます。絹のような細い糸ですがとても強いものでした。

最初に、小魚を釣ります。砂場にいるゴカイやアサリを取って、小さくちぎって小さめの針にかけます。釣った小魚は、今度は、大きめの針に背掛けにして、海に投げ入れます。この小魚を生き餌として使うと、バシーンヤ（ヒラスズキの仲間）やアカート（マダイの仲間）が釣れるのです。カイは、小魚を釣って木桶のなかに海水を入れて生かしておきました。セイジャは、カイの釣った小魚で大物を狙います。小魚の数が充分になると、カイも大物狙いの仕掛けに代えました。

今日は、大物のアタリがなかなか来ません。いつもは、イツラワンの北側の岩場にバシーンヤの群れがいるのですが、その姿が全く見えません。

日の出から漁に出て、太陽が一番高いところに来た頃です。とても大きなアタリがセイジャの竿にきました。竹の竿がちぎれんばかりに曲がります。大物のバシーンヤでしょうか。大きいものだと長さは、3尺近く（105cm）、重さは 15斤（9kg）にもなります。でも、この引きはただ者ではありません。

舟がひっくり返るかと思った瞬間にそれが見えました。それは、バシーンヤ（ヒラスズキの仲間）ではありませんでした。水面からもその群青の姿を垣間見ることができます。

長い長い槍を頭から突き出しています。それは、10尺(3.5m)のアギトウヤ（バショウカジキ）

でした。

「兄よ。このサカナは神の使いじゃ。はよう糸を切れや。」

「わかった、カタナを出してくれ。」

すぐに、カイは、竿の穂先の幹糸を切りました。でも、どんどん舟が沖の方に曳かれていきます。どうしたことでしょうか。実は、この舟はイカリを持っていません。流れに任せて釣り場を移動するようになっていました。舟の尾に小さな帆と流れを捕まえる紡錘形の布を備えているのです。

小さな帆は、今ではスパンカーと呼ばれているもので、舟の鋒（きっさき）を一定方向に向けるのに使います。紡錘形の布は、舟の下に沈めて流れに対して抵抗になるように働きます。今では、パラシュートアンカーと呼ばれています。

父親のコウティは、とても優れた舟大工で、小さな帆も紡錘形の布も自分で考え出したものでした。丘の上から、妹のトウリヤと弟のキータイが海上の舟を見ていました。帰りがいつもより遅いので気になったのです。

イツラワンからは、2里（約1,000m）ほどの沖合でした。曳かれていく訳がわかりました。アギトウヤの槍が、舟の下に沈めた布を貫いたのです。紡錘形の布は、丈夫な麻紐で舟に結わえられていました。すぐにふりほどくことはできません。二人は、舟にしがみついているのがやっとでした。速度は、20ヒラ（時速40km）ぐらいでているようです。

アギトウヤ（バショウカジキ）は、海中では、時速160kmものスピードで泳ぐと言われています。20ヒラぐらいのスピードは、全然問題ないのです。

丘の上にいる弟キータイが異変に気がつきました。すぐに姉の袖をひっぱりました。姉のトウリヤも気がつきました。「キータイ、ここで見てるのよ。わたしは、ムラオサを呼んでくる。」

しばらく経つと舟は大きな波しぶきの中に漂っていました。水深が深くなるほど、波が高くなるのです。いつのまにかアギトウヤ（バショウカジキ）は、いなくなっていました。陸は、もうみえません。たぶん、40里（約20km）ぐらい沖合に流されたのでしょう。もはや、艦でこいでも戻れないことは、はっきりと分かりました。

気がつくとも南東のマキグモ（入道雲）は、空高くまでその姿を見せつけています。もうすぐ嵐がくるのは確実でした。カイとセイジャは、昼餉に持ってきた干飯（ほしい）と竹に詰めた水を、腰紐にしっかりと結わえ、舟が返らないようにミヨシ（船の先端）にカイ、トモ（船の後端）にセイジャが陣取りました。

そして、ついに嵐がやってきたのです。嵐になる予感も、もちろん目で見て分かる場合もあります。現代の漁民は、針が立つという表現で天候の悪化を予測します。これは、気圧が下がると気圧計の針が12時方向に向くために“針が立つ”という表現になったのでした。でも当時の漁師達は、肌で感じていました。気圧が低いと代謝が悪くなるのが分かっていたのです。

「大あらしになるな！」

「舟にカラダを結わえろ！」

「わかったー。」

風がだんだんと強くなっていきます。波の高さも5尺（約175cm）を越えました。もはや、小舟ではなすすべがありません。そこに強烈な雨がたたきつけます。体温も一気に下がりました。

「カイー・・・だいじょうぶかあー！」

「セイジャー・・・なんとか、こらえろー！」

ますます風は強くなり、波が逆巻くようになりました。舟はすんでのところで沈没をまぬがれながら、あちらこちらに移動します。黒い雲が全天を覆い、もはや夜と昼の区別さえ付かなくなりました。時折、雷鳴がとどろき、もはや視界はほとんどありません。舟には、容赦なく波が襲いかかり、カイとセイジャが木桶で掻きだしてもどンドン浸水が酷くなっていきます。

そして、数時間。ついには、舟は転覆し、カイとセイジャは、波の中に消えました。不思議なことにうすれゆく意識の中で、だれかが呟いているのがカイには、聞こえました。「・・・あ・ぶ・な・い・な・・・」

「・・・た・す・か・る・か・な・・・」

「・・・わ・か・ら・ん・な・・・」

ここは、渤海国の港イツラワンから、100kmほど東の海上です。日本までは、600kmほどの場所でした。時は、703年。渤海が建国されて5年が経っていました。日本は、飛鳥時代の末期です。東北地方では、蝦夷の勢力と大和朝廷の勢力が対峙していました。

カイが目を覚ましたとき、嵐は去っていました。不思議なことに、大きな流れ藻にカラダを結わえてあります。流れ藻は、80尺(28m)以上あるでしょうか。潮の流れに乗ってゆっくりと漂っています。セイジャも10尺（3.5m）ほど離れたところに横たわっていました。大きな声で叫びました。

「セイジャー————！」

セイジャは、その大きなカラダをゆっくりと身震いさせたかと思うと、大きな笑みを浮かべながら、

「カイよ、助かったかな・・・。」

カイも大きく頷きました。

「喉が渴いたな。」

カイは、腰に結わえていた竹筒から水を一口飲みました。これで一息つきました。セイジャも、同じく自分の竹筒から水を飲みました。生気が戻ってきました。セイジャが言いました。

「腹がへったなあ。」

腰に手を回しても干飯（ほしい）は、流されて無くなっていました。カイもちょっとげっそり

しながら、

「こっちの干飯も流された・・・。」

目の前の流れ藻をふと見ると、アカモク（ギバサ）の仲間のようです。食べられるかもしれません。細い部分を口に含んで噛んでみました。食べられます。適度に塩気を含んでいて、それに何度も咀嚼しているうちに、粘りけがでてきて口の中に香りが広がります。

飲み込んでみると空腹が少し満たされました。

「セイジャ、これは、アカモクだ。食べるぞ。」

「これは、助かる・・・。」

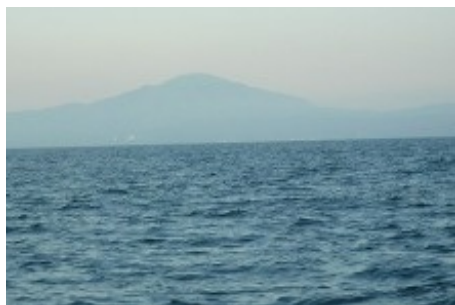
二人は、細い茎を選んで、食べました。これでなんとか食べ物の確保はできました。一息ついたので、周囲を見回す余裕ができました。たぶん、日の出から数時間経っているのでしょう。東の空から、こうこうと太陽が照りつけています。

彼らは、目を凝らして、舟の影を探しました。でも、なにも見えません。そして、また夜になりました。二人は、流れ藻の上に簡単なベッドをつくって寄り添って眠りました。

もう水が残り少なくなってきました。でも、疲れていたせいもあるのでしょう。いつのまにか、眠っていました。

明るく朝は、日の出と同時に目覚めました。日が上がるにつれ、遠くにうっすらと大きな島が見えてきました。見たことの無い島です。たぶん、20里（10km）ぐらいの距離です。

この潮の流れだと、島に近づけるかは、なんとも言えないところでした。



そのときです。遠くに舟の影がみえたのです。大きな舟でした。だいたい4里（約2km）先を、進んでいます。帆を大きく弓なりに膨らませて、南の方向に向かっていました。

カイは、ちょっと迷いましたが、おおきく手を振りながら、

「おおおおおおー———いい」

と、あらん限りの声を振り絞って叫びました。セイジャも後に続いて、手を大きく振りました。海は、少し波立っていました。でも流れ藻のあるところは、潮目が変わっていて目立つ場所ではありました。そこで、なにか動くモノがあればよくわかります。

舟は、鋒（きっさき）を変えました。舟から艚（ろ）が左右に10本ほどでています。あきらかにこちらに気がついたようでした。舟の大きさは、長さが50尺（17.5m）、幅が15尺（5.25m）ぐらいでしょうか。軍舟のようです。

このころの軍舟は、船底が平底で全体に四角く箱が海に浮いているような感じでした。舟を回頭させるには、舵を切るほかに櫓を使って向きを変えていました。もう、一里（500m）を切っています。船首に数名の男が乗っているのが見えました。櫓をこぐ様がきちんとリズムののってきびきびとしています。よく訓練されているようでした。50尺（17.5m）の距離でとまりました。

男達は、カイ達に話しかけました。

「*****？、*****？」

どこからきたのかと聞いているようでした。

カイは、右手を西の方にむけて、

「ポーハイ！、ポーハイ！」と答えました。

ポーハイとは、渤海のことです。

男達は、少し相談してから先端を丸くしばった縄を投げてきました。カイとセイジャは、腰のまわりに縄を巻きました。男達はそれをたぐり寄せてくれました。

舟からは、さらに縄ばしごが降ろされました。二本の縄のあいだに一尺程度の木が結わえられています。木と木の間隔も一尺ぐらいです。

船縁までは、10尺(3.5m) ぐらいあります。海水を含んだ着物は、ずっしりと重く、一段一段上っていくのはとても大変でした。それでも、ようやく登り切ることができました。

男達は、とても驚いた様子でした。カイとセイジャは、紅毛碧眼で、身の丈も5尺5寸(190cm)の長躯だったからです。渤海を建国した民は、起源を東ヨーロッパにもつ、いまでいう欧米人が祖先でした。

カイとセイジャは、大海を渡るとそこにヤマトという国があることは、知っていました。

そこで、自分の方を指さして

「ポーハイ、ポーハイ」

相手を指さして

「ヤマトー？」

と聞いてみました。

男達は、とても怒った様子で、大きく手を左右に振って否定します。男達の中には、身構えるものもいました。

そして、男達は、自分らを

「エンチュ」

と呼びました。

これが、のちに大和朝廷が彼らを蝦夷（えみし）と呼んだ語源とされています。

カイは、理解しました。彼らは、ヤマトと敵対する勢力なのだろう。そして、ヤマトと戦争中であることを。

カイは、大きく頷いて承知した旨をあらわしました。

船倉から一人の男が、食べ物と水を持ってきました。果でした。とても美味しい干し柿です。

二人は、瞬く間に平らげました。カイとセイジャが感謝の意をあらわすと男達には、理解でき

たようでした。

そのなかにオサだと思われるあごひげの長い男が言いました。「これから港に帰る」ということが、なんとなくわかりました。

そこは、恩荷（おんが）という半島でした。彼らが島だと思ったのは、実は、海に突き出た半島だったのです。後の時代に男鹿半島と呼ばれるようになりました。

エンチュ(蝦夷)の舟は、恩荷（おんが）半島の北西部にある遠賀（とおが）湾というところにつきました。岩場に囲まれた砂浜です。天然の良港でした。

恩荷（おんが）半島は、正史の中では、658年にはじめて現れます。阿倍比羅夫（あべのひらふ）が、水軍を率いて蝦夷を討ったとの記述が日本書紀にあります。今は703年の秋、このころ恩荷半島は再びエンチュ（蝦夷）の支配下にありました。

村人達が、舟を出迎えます。この村に住むものは300人ほどでした。オサは、舟に乗っていたイマキレでした。髭が立派な狩りの名人でした。

舟からカイとセイジャが降りてくると、「おおーっ」とどよめきが起きました。紅毛碧眼で長躯な二人は、まさに異国のひとでした。当時の蝦夷の民は、狩りと漁業を生業（なりわい）として暮らしていました。身長は、成人男性でも150cmを越えることは珍しかったのですが、そんな中に現れたカイとセイジャは、身長が190cmにも届こうかという偉丈夫で村人達にとっては、とても大きく感じられたのです。

「オニじゃ、オニじゃ・・・」

村人たちが口々に叫びます。彼らの肌は、白人特有のピンクがかった肌色です。村人たちがアカオニだと思っても不思議はありません。

「まてまて・・・まて・・・」

イマキレが、制止します。

「このものたちは、西の国の漁師だ。嵐で流されたようだ。役に立つかもしれない。丁重に扱え・・・！」

カイとセイジャは、オサの住まいの脇にある木小屋で生活を始めました。最初は、身振り手振りだった会話も、一月もすると片言での会話ができるようになりました。もともと漁師だった彼らは、村人たちの漁を手伝いました。腕の良さは、すぐに評判になりました。

あるとき彼らは、近くにあった丸木をくりぬいて舟の模型を作りました。舟の底は、平底ではなく、鋭角になっていました。父親から受け継いだ知識でした。これは、現在ではキール形状と呼んで、船の設計にはかせないものです。

イマキレは、ちょっと驚いて、舟匠（ふなたくみ：船大工）のツクシを呼びました。

遠賀湾の浅瀬で、舟を浮かべ走らせてみました。

ツクシは、驚きました。

「これは、速いぞ・・・。」

「今度の戦いのために、新しい舟を作ろう。」

イマキレは、コオサたちを集め、造船計画を練りました。もちろん平底ではなく、キール形状です。

恩荷（おんが）半島には、冬が迫っていました。雪が積もるともはや戦いはしません。兵力の消耗が著しいからです。春の戦（いくさ）に備えてじっとしている日々が続きます。

ところで、イマキレには、二人の娘がおりました。ミナセとミマナの兄弟です。ミナセは17歳、ミマナは19歳。二人とも素潜りが上手な気立ての優しい子たちでした。

カイとセイジャの身の回りの世話をしたのが、二人です。最初は、こわい気持ちもあったのですが、毎日、顔を合わせるうちに打ち解けてきました。やっぱり、毎日顔をあわせるのが大事です。

そうして、カイとミナセ、セイジャとミマナは、恋におちました。二人とも一歳年上でしたが、姉（あね）さんのほうがうまくいくようです。

ある日の明け方のこと、カイは、夢のなかでまた例の声を聞きました。

「・・・・・・・・やっぱりまぢがいないな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あ・と・1・0・0・年・か・・・・・・・・」

でも、目覚めたときには、まったくキオクがなかったのです。

冬です。もう沖合での漁はできません。魚たちも深場に逃れたからです。それでも恩荷（おんが）半島には、冬場に岸に寄ってくる貴重なサカナがいました。カムヌイ（現在のハタハタ、漢字では鰯）でした。産卵のために岸に寄ってくるカムヌイは、岸からでも網で掬うことができます。

そして、海草に生み付けられたブリコ（タマゴ）は、海が荒れると岸に打ち寄せられて、食糧にできます。カムヌイは沢山捕れたので樽につけ込んで保存食としました。鰯のなれ鮫のように乳酸発酵させたものです。これが、雪解けまでの貴重なタンパク源でした。

雪が降ってからは、カイとセイジャは、あることに打ち込みました。そして、年越しの日に、子供のいる各家々を回って、子供達に贈り物をしたのです。それは、男の子には木彫りの舟、女の子にはお人形でした。

かれらの木工技術はとても優れていて、小刀ひとつでいろいろなものを彫ることができました。小刀は、流されたときも腰に巻き付けた革製のさやにしっかりと差し込んでいたので無くすことはありませんでした。木の実をすりつぶして作った油を塗り込んでいたので、刃が錆びることもなかったのです。

年越しの日に子供達を祝福する行事として、ちょっとカタチを変えましたが、これは後になまはげという風習になりました。

「セイジャ、一度クニに戻りたいの。母じゃはどうしておろうか。」

「カイ、心配してもなんもできない。イツラワンの村のひとたちが何とかしてくれてるじゃろう。」

「セイジャ、舟は、100尺（35m）はないとこの大海（おおうみ）は、渡れないだろうな。」

「よし、なんとか帰る術（すべ）を考えようか。」

彼らが恩荷（おんが）の地に住み始めて、5ヶ月ほどになりました。雪解け水が沢を勢いよく流れていきます。3月の恩荷（おんが）は、まだ朝方は冷え込みましたが、沢沿いに芽吹いたばっきや（ふきのとう）が 春の訪れを感じさせてくれます。

「カイよ、ミナセは、いい子じゃの。」

「セイジャ、ミマナは、気立てもいいし、綺麗だな。」

どうやら、二人は、ある決意を抱いたようでした。

カイは、昼食を運んできたミナセを手招きで呼び寄せ、オオタイワまで連れて行きました。オオタイワは、遠賀（とおが）湾の湾口にある大きな岩です。いつもは、釣り糸を垂れて ちなさ（クロダイ）を釣っている場所でした。

「ミナセ、聞いてくれ。ウォは、おまえが好きだ。ウォと一緒にしてくれ。」

唐突なプロポーズでしたが、ミナセは、顔を赤らめてコクンと頷きました。

「あしも、なのこと、好いとるよ。」

まだ、コトバはぎこちないところがありましたが、お互いの目を見つめ合うことで気持ちが通じました。たぶん、いまセイジャもミマナに求婚しているころでしょう。

カイとミナセが、木小屋に戻るとセイジャとミマナが、ちょっと上気した表情で座っていました。

セイジャが口を開きます。

「カイ！、ミナセ！ ウォは、ミマナと一緒にいる。」

カイとミナセは、おおきな笑みをうかべて頷きました。

「こっちもじゃ、こっちもじゃ。」

4人は、とてもうれしそうに笑い合いました。

書いている作者も楽しくなっています……。

そして、4人で父親のイマキレのところに行きました。

「4人そろってどうしたか？」

彼らが、答えようとしたときに、ある男が飛び込んできました。

それは、サーモリ（沖合の様子を見ている見張り役）でした。

「おおぜいの軍舟じゃ、10艘以上おるぞ……」

奇襲でした。イマキレは驚きました。まだ水がぬるんでいないと思っていたからです。すぐに、伝令を走らせました。

カイは西方向に、セイジャは山方向に伝令として向かいました。小一時（こいつとき）経って、戦（いくさ）仕立てを終えた村人たちが、ぞくぞくと遠賀（とおが）湾の湾口に集まってきます。人数は、30名ほどになりました。

海の彼方に見えたヤマトの軍舟は、みるみる近づいてきました。親舟が2艘、子舟が12艘でした。親舟の長さは、60尺（約20m）ありました。ここに40人ほどが乗っているはずですが、そのうち漕ぎ手が左右に6人、計12人いるので20数名が戦い手でした。子舟は、親舟のうしろに6艘ずつ縄で繋がれて曳かれています。

遠賀（とおが）湾の湾口まで、一里（約500m）のところでイマキレは、ちょっと異変に気がつきました。ヤマトの軍舟に戦闘用の赤い旗が掲げられていません。通常時の白い旗のままです。戦う意志がないようです。どうやら、話し合いに来たのでしょう。

「戦いではないようだ、弓矢は、構えるな！」

村人達に指示を出しました。

一艘の親舟から、数人の男が、子舟に移りました。繋いでいた縄をほどき、こちらにやってきます。立派な軍服を着た頭（カシラ）とおぼしきものの他に護衛が2人、漕ぎ手が2人乗っていました。

湾口を過ぎてから半里（約300m）で砂浜につきました。イマキレは、頭（カシラ）と護衛2人を、木小屋に案内しました。木の机をはさんで、3人ずつ座りました。

イマキレが真ん中で、コオサのルリベと同じくコオサのカウナです。カイとセイジャは、入り口に見張りとして立ちました。

イマキレが、口をひらきます。

「エンチュのオサ、イマキレだ。」

「秋田の国守（クニモリ）、和田綱（わだのつな）だ。」

「どういう用件か？」

「和睦の提案じゃ……。」

イマキレは、驚きました。

「理由（わけ）は、なにか？」

「詳しくは話せないが、兵を耗することができなくなった。」

このころ、ヤマトの政権中枢では跡目争いが起こり都（みやこ）を二部する争乱状態となっていたのです。そのために地方への指示ができなくなったからでした。

「承知した。それで境はどうするか？」

「舟越より北はエンチュの国。境は舟越川。」

舟越川は、現在の船越水道です。八郎潟から日本海に注ぎ込む川が舟越川でした。

「それで否（いな）はない。」

阿倍比羅夫（あべのひらふ）の侵攻から46年、たくさんの血が流れてきましたが、ようやく平和が訪れました。そして、このことがカイとセイジャの運命を大きく変えることになったのです。

「さあ、宴の用意じゃ！」

秋田の国守（くにもり）の舟が、視界から消えてから、イマキレが、みなに命じました。

遠賀（とおが）湾の湾口に、男達がくりだしました。ちなさ（クロダイ）を釣るのです。

ちょうど、のっこみ（産卵期）で、食いが立っていました。おもしろいように釣れてきます。大きさは、1尺から1尺2寸（35cmから42cmぐらい）。またたくまに、数10枚のちなさが、竹かごのうえに重なりました。

女たちは、窟のなかにある甕（かめ）を持ってきました。西日本には口噛み酒がありました

、彼らはヤマブドウから果実酒を作っていました。いまでいうトロッケン・ベーレン・アウスレーゼ（貴腐ワイン）です。ぶどうを霜が下りる直前まで干してから醸すのです。糖度がとても高いワインでした。

そして、クリと干し柿が並べられます。クリは、大きな陶製の甕で茹でられました。

日が高く昇ったときに、準備は整いました。イマキレが、声高く宣言します。

「今日は、とてもめでたい日になった。40年にわたるイクサが終わった。」

「そして……」

と続けました。

「わしのところに、ムスコがふたり増えた。」

みんなが歓声をあげました。

「カイは、ミナセと結ばれる。セイジャは、ミマナと結ばれる。」

村人たちは、うすうす感じていましたが、みなうなずき合って拍手をしました。

カイとセイジャは、とても優れた漁師であるうえに、舟匠としての能力も知れ渡っていました。宴は、おおきなたき火を囲んで、日が暮れるまで続けました。村人は、みな笑みをうかべていました。

そして、その夜、カイは夢うつつの中でまたあの声を聴きました。

「……………コマチの高祖父だね……………」

「……………17ぱーせんとの根拠が……………」

「……………でも、どっちかな……………」

もちろん、意味がわかりません。そして朝になると、声のことは、すっかり忘れていたのです。

6月になってイマキレの家にもう二軒、木小屋の離れができました。もともとあった木小屋は、アツマりに使います。そして新しい家は、もちろん、カイとミナセ、セイジャとミマナ の夫婦が住むのでした。

二組とも若い夫婦でしたが、歳のわりにはしっかりとしていました。

この村は、イマキレがオサでそのほかにコオサが6人いました。各部落のオサです。釣りの名手、弓の名手、舟の匠、酒造りの達人、布編み（網作り）の手、大工の棟梁です。みな手練れでした。

大事なことは、イマキレを含め7人でアツマリをして決めました。イマキレは、コオサを集めました。なにか大事なキメゴトがあるようです。

「今回のアツマリは、これからの備えについてじゃ。イクサが終わったいま見直さねばいけないだろう。」

皆は、すぐにわかりました。いまのことばでいうと、中長期的な防衛の体制をどうするかということでした。

「いままでのようにサーモリ（沖合の様子を見ている見張り役）をおくことは必要ないじゃろう。それよりも、余った人手を狩りに出したらどうか。」

弓の名手のメツリが言いました。

「たしかに獲物を蓄えることは、大事じゃ。食べ物がないと飢えるからの。」

みなが頷きました。

イマキレが口を開きました。みなが目しています。

「実は、交易と同盟を考えているのじゃ。」

みなが驚きました。

「イクサが終わったといえど、次の国守（くにもり）が、ことばを翻すとも限らん。そのまえに、チカラをつけたい。そのための手段として交易と同盟を考えた。」

706年当時は、ヤマト政権とエンチュ（蝦夷）は、対峙しており一時休戦となったとしてもいつまた戦火が起こるとも限らない状況でした。やはりオサたるもの、現状認識と最悪の想定に対策がうてるものでなくてはなりません。イマキレは、その才をもっていたのです。

「ちょっと入ってくれ……！」

イマキレが、木小屋の外にいるものを中に入るように促しました。

入ってきたのは、カイとセイジャでした。

「これを思いついたのは、この者達の能力（チカラ）を見てのことじゃ。」

「この者たちには、海をわたるチカラがある。だから大きな舟を作って、海をわたり西のクニとむすぶことを考えた。」

確かにクニを富ませるのに交易は、最適の手段です。そして防衛のために同盟を結ぶのも現代の戦略としても充分通じます。実は、イマキレには、別の思惑もありました。カイとセイジャに故国の地を踏ませたいとも思ったのです。

そして舟の建造が始まりました。北のシラカミからも舟匠（船大工）達がたくさん手伝いにきました。造船のまえに、彼らはシンジャという山の頂に小さな祠（ほこら）をつくりました。アカガミという海の神を祭ったのです。

その999段の階段を作るのにカイとセイジャが活躍したことがそののち、なまはげたちが神社の階段をつくったとされる伝説の起源となったのです。

舟の建造準備は、ちくちくと進んでいました。恩荷（おんが）半島では、良質の杉（し）いだ）がとれます。舟材として使うには、伐採して乾燥させる必要があります。乾燥期間は1年でした。

今年は、材料の杉を集めるための年になります。カイとセイジャの提案で同一形状の舟を二艘つくることになりました。

長い航海は、船団を組む必要があります。航海中に問題が生じても二艘あればその生存確率は飛躍的に高まります。いってみればRAID1のバックアップシステムです。

9月のある日のこと。カイとセイジャが、杉の丸太を乾燥場（かわきば）に持って行った帰りでした。午後の4時頃でしょうか。

この年は、残暑が厳しく二人は、汗をふきふき山道を下りてきます。山道の入り口で、ミナセ

とミマナがニコニコしながら出迎えてくれました。ミナセがカイに近づきます。

ミマナもセイジャに小走りに駆け寄りました。ミナセが、ちょっともじもじしながら、カイに耳打ちしました。

「子ができた……………」

ミマナもセイジャにささやきました。

「わしもじゃ。」

カイとセイジャは、小躍りして喜びました。

「いつか？」

「雪解けのころじゃの。」

ミナセが答えました。

「わしもじゃ。」

ミマナも答えます。

「すぐにオサに知らせねばな。」

4人は、ちょっと小走りにウチに戻りました。でもカイもセイジャも彼女らが転ばぬようにそれとなく気を遣っていました

オサのイマキレは、とっても喜びました。

「来年は、じいになるのか……………」

これまで、エンチュ（蝦夷）と紅毛碧眼の民が婚姻したことはありません。でも異なる血が交われればとても美しい子が生まれるといういつたえがあることは知っていました。

そのときでした。

5人は母屋（おもや）にいましたがハッキリとひとの気配を感じました。それも空の上からです。見上げました。

でも見えたのは、天井の組柱でした。

「なんじゃろう。」

「なにか！」

「モノノケか！」

でも、なにも起こりません。イマキレがみなを静めるように口を開きました。

「おおかた、アカガミさまが、聞き耳をたてていたのじゃろうて。」

イマキレのことばにミナセとミマナは、安心した表情に変わりました。でも、カイだけは、口には出さずに「あの声のぬしじゃ！」と思いました。そしてしばらくは誰にも話すまいと思ったのです。

恩荷（おんが）は、海に突き出た半島で周囲が160里（約80キロメートル）あります。カタチは、片足を突き出したようなシルエットです。ここは、豊かな海の幸に恵まれていました。サカナと海藻と貝は、一年中、潤沢に採れました。春には、ミズ、フキ、コゴミ、ワラビなどの山菜が豊富にありました。秋に山を歩けば、あけび、クリ、カキ、クルミが沢山採れました。

でも農作業ができる土地はほとんどなかったの、彼らは、北に住むナガシロの民と交易をしていました。サカナとイモを交換していたのです。

エンチュ（蝦夷）の村は、現在の北海道から宮城県のあたりまで各地に点在していました。ゆるやかな繋がりをもった都市国家群でした。強固なクニにならなかったのは、それを支える中心となる農作物がなかった為でした。

当時は、既にアジア、ヨーロッパ、アフリカは米麦を、中米マヤではトウモロコシ、南米インカではじゃがいもが中心となる作物として栽培されていました。そのため強大な国家群が各地に現れていました。そういう意味では、クニとしてのチカラは少し弱かったかもしれません。

年があけ、雪解けの水が沢をつたう頃、相次いで新しいのちが生まれました。セイジャとミマナの子は、女の子でした。数日経ってからカイとミナセには、男の子が生まれました。

女の子は、アイナイと名付けられました。あざみの花という意味です。美しく育てて欲しいとの願いからでした。透き通るような白いほっぺがとても綺麗でした。

男の子は、クセリと名付けられました。勇者という意味です。生まれたときから手足が長いのが見て取れました。きっと腕のいい漁師になるに違いありません。

オサのイマキレは、

「天からの授かりものじゃ、授かりものじゃ……。」

と、ずっと相好を崩しています。ミナセとミマナも笑っています。家族が増えたことで一層、笑いが増えました。

そして、朝のひざしが、少し強くなってきた頃、イマキレは、舟匠のルリベを呼びました。

「そろそろ、丸太の乾き具合を調（み）てくれ！」

ルリベは、早速、山の乾燥場（かわきば）に行きました。切り落とした丸太の断面を、木槌で叩きます。

「コォーン、コォーン」

麓（ふもと）の遠賀（とおが）湾にも音が響きます。音の響きで乾燥具合が分かるのでした。現代でも、叩いた音を周波数解析することで乾燥具合や朽ちているかどうか分かるそうです。そして、数十本の丸太の乾き具合は充分だと確かめられました。

イマキレは、アツマリを開いてコオサ達に命じました。

「月が明けたら、舟作りに入る。それぞれ自分の役をしっかりとやってくれ。それから、シラカミに使いを出してくれ。」

舟造りの段取りが整いました。ある晩、クセリが眠ってからのことです。カイは、ミナセに話しました。

「ミナセ、聞いてくれ。ワレたちは、ずうっと一緒じゃ。だから話をする。

ひとつ気に掛けていたことがある。」

ミナセは、ちょっと怪訝（げげん）な表情をしましたが、いつものような笑みに戻ると、

「なんでも、話してくれや。」

「月にいちど、だれか見ておる。それも天からじゃ。」

「そうれば、アカガミさまじゃろなあ。」

「たしかに、アカガミさまかもしれん。2年前に海に流されたときにも、流れ藻に載せて助けてくれたのやもしれぬ。」

「そのおかげで、なと連れ添うことができた。ありがたいと思ってる。」

カイは、安心したようにミナセのほおを撫でました。

「来月から、舟づくりが始まる。アニとワレは、ワカガシラとしてチカラを使う。できあがれば、来年は、海にでるだろう。」

「ポーハイ（渤海）のことが、心配なのじゃか？」

「ときどき夢をみる。あの日のことは、まぶたのうらに焼き付いている。」

「はよう、行ってあげたらいいなあ。」

「この海はととてもとても大きい、それに荒波じゃし。」

「だいじょうぶじゃ、アカガミさまがついておろう。」

カイは、ミナセをぐっと抱き寄せました。

もうすぐ、舟造りが始まります。マキグモ（入道雲）の立つ季節になっていました。舟の建造が始まりました。当時の平底舟よりも頑丈な、キール（竜骨）をもった舟です。全長は、80尺（約28メートル）の帆船でした。

一般に、全長が長いほど船体は安定します。波の波長よりも長いほど揺れが少ないわけで、“大舟に乗ったような”という安定感が期待できるのです。

最初に、百分の一の模型を作りました。砂浜に擬似的な航路を掘って、船首に縄を結わえ人手で曳くことで安定性を確認しました。

オサのイマキレが、模型の様子を見に来ました。

「オマエたちは、木彫りがウマイの。」

「テヤ（父親）が、舟匠だったから小さい頃から仕込まれたんじゃ。」

すこし、ドヤ顔をしながらカイが答えました。

「本舟（ほんぶね）に取りかかるのは、いつか？」

「月があけたらかかるつもりだ。」

「それで・・・」とカイは、逆にたずねました。

「乗り手は、どうなるかの？」

乗り手とは、実際に舟に乗るひとたちのことです。舟師（舟長）、舵師（かじし、操舵長）、舟匠（舟大工）、水手（かこ、漕ぎ手）が最低限、必要でした。

エンチュ（蝦夷）の村は、山中にあるものと海岸沿いにあるものと二手に分かれていました。イマキレは、海岸沿いの村に自ら出向いて航海の目的を説明して支援を依頼しました。すでに舟匠の支援を仰いでいましたが、あらためて水手（かこ）になるものを集めようとしたのです。

最初は、シラカミの村ヤツモリに行きました。陸路では、片道120里（約60キロメートル）の距離でした。今回は、岬を廻って、海岸沿いに北上しました。途中のヨーイナ川（現在の米

代川) を渡る必要があったからです。そしてヤツモリのオサ、ハテナイと会談しました。

「それで、ワレには、なにがあるのか。」

自分らにとってどんなメリットがあるのかとの問いです。

「コウエキで糧をえることができよう、それに新しいイクサジタテもじゃ。」

食糧や植物の種、それと新しい武器が手に入ると説きました。

「やしーた。出発は、いつか？」

ハテナイは、納得してくれました。

「来年の夏じゃ、長雨（梅雨）があけてすぐじゃ。」

こうしてヤツモリからは、20人ほどの水手（かこ）を集めることができました。模型での性能が確認できたので、本舟の部材造りに入りました。丸太に墨を入れていきます。すでに百分の一のパーツがあるので、仕事は、はかどりました。

イマキレが、コオサ達を集めました。今回のアツマリからカイとセイジャも加わりました。イマキレが代表取締役、コオサ達は取締役、カイとセイジャは秘書室の室員といったところです。

イマキレが口を開きました。

「ヒトアツメは、うまくいった。ヤツモリとカソセ（現在の風合瀬）から水手（カコ）が集まる。」

一息ついて、続けました。

「それで、舟の名を決めた。セイリュウとビヤッコにする。セイリュウは、東の守り神、ビヤッコは、西の守り神じゃ。今回の航海は、東と西を繋ぎしもの。そういう願いをかけてのこ
とじゃ。」

こどもたちは、すくすくと育っていました。セイジャとミマナの子、アイナイは、目がくりっとして瞳がブルーでした。セイジャに似たようです。カイとミナセの子、クセリは、つたい歩きができるようになっていました。運動神経がとてもいいようです。

そして雪が降る前にこの年の舟造りは、いったん終わりとなりました。年があけて蕨（ワラビ）の芽がではじめた頃、舟の建造を再開しました。山の端には、まだところどころに根雪が残っています。夜明けは、ずいぶんと早くなり、風の冷たさはすこし和らいできました。

カイとセイジャは、朝起きるとすぐに砂浜に向かいます。ふたつの大きな櫓（やぐら）が組み立てられ、舟の底部が組み立てられていました。カイは、青龍を、セイジャは、白虎を担っていました。二艘の舟は、まったく瓜二つでしたが、船首の舳先かざりだけは、一艘は龍、もう一艘が虎の彫り物でその違いを示しています。

部材は、すべて揃っていたのであとは組み上げるだけでした。釘（くぎ）は、使いません。臍（ほぞ）穴に差し込んだ部材を固定するためにすき間に楔（くさび）を打ち込みます。板と板を繋ぐ際には、松ヤニを断面に塗りました。防水のためです。木材は水で膨張することから、進水したあとはより強固な構造になります。

カイとセイジャが、木組みをしているとオサのイマキレに呼ばれました。

「それで、オマエ達は、この大海（おおうみ）を渡ったのじゃな？」

「たぶん5日かかって、渡ったと思う」

セイジャが答えました。

「であれば、真っ直ぐに西を目指すのがよいか？」

イマキレの質問の意図がだんだん理解できてきました。当時の航海は、陸を望みながら目的地まで進むという沿海航法が主でした。磁石は発見されていましたが、それをコンパスに応用したのはずっとあとの時代です。イマキレは、直接海を渡る航路を考えていたのです。

カイとセイジャが頷きました。

「ハウガクは、どうすればわかるかのう？」

「ヒドケイを使えばいいじゃろ。」

太陽が南中するときその影の位置が北を指します。また夜になれば北極星が目印になります。少しばかりの不安はありましたが、カイにはもうひとつ目論見がありました。

アカガミさま、そう、海の守り神です。自分のことをずっと天から見守ってくれているとカイは、確信を持っていたのです。

夏の盛りになりました。もうすぐ、進水です。最初の航海は、往復5日間、陸をみながら北上して、ヨーイナ川（現在の米代川）をめざします。訓練航海です。舟の癖をつかむのが大きな目的でした。

大きな帆が3張（はり）備えられていましたが、張り具合と角度の調整が課題です。舟師（舟長）は、コオサの中から、ルリベとカイナが命じられました。舵師（かじし、操舵長）、舟匠（舟大工）は、カイとセイジャが務めます。舟乗りとしても、舟匠としても優れた腕をもっていたからです。

作ったときと逆に、カイが白虎を、セイジャが青龍に乗り組みます。不具合があればそれを見つけやすくするための方策でした。品質管理面でのダブルチェックというわけです。

水手（かこ、漕ぎ手）は、それぞれ20名ほどが乗りました。湾をでるまでは、漕ぎ手によって舟を進めます。出たあとは、帆を張って航海をします。

沿岸を進むときにもっとも危険なのは、座礁です。従来舟より吃水が深いのでより慎重に操舵しなければなりません。カイとセイジャは、漁に出る度に何度も山立て（海上から山の位置を確認して自分の位置を知ること）をして事前に十分な深さの航路を想定していました。

そして進水の日がきました。村のものが全員集まりました。数週間前に長雨（梅雨）は去って、とても天気の良い日でした。

アイナイは、ミマナに抱かれてやってきました。クセリは、ミナセに手を引かれて歩いてきました。クセリは、黒い髪でしたが、アイナイは、亜麻色の髪（少し薄い色の金髪）です。遠くからでもよく目立っていました。村のものは、最初は驚いていましたが、いまではだれも気にしていません。カイとセイジャが遠賀（とおが）湾にやってきて3年目の夏でした。

今回の航海の目的は、渤海王に謁見して、交易のみちを開くことにありました。渤海は、建国して10年ほど。国力をだんだんと蓄えていく時期でした。彼らにしても新しい交易先は、あら

たな産物を取り入れる絶好の機会のはずです。

オサのイマキレは、コオサのなかで筆の立つ者に、親書を書かせました。

「われは、倭国の北方を治めしもの。エンチュのオサ、イマキレです。貴国の民が遭難して流れ着いたのを助け、こうして送り届けました。その者達によれば、貴国は、物資豊富で商業が隆盛し、様々な学問にも通ずると聞いています。願わくば、当方と交易のみちを開き、お互いの産物を換えようではありませんか。そして、貴国の学を教授願えないでしょうか。」

という内容でした。

幸い、カイとセイジャは、通司としての役目もできます。イマキレは、この航海にとっても大きな期待をもっていました。エンチュからの産物は、干しぎかな、干し柿、干した山菜類。そして、極めつけの進物が、砂金でした。当時の日本は、渡来の技術者達が関東地方を歩き回り708年に秩父郡から、和銅（ニギアカガネ）が発見されヤマト朝廷に献上された時期で年号が和銅に改められました。同じ時期に、すでにエンチュ達のあいだでは、砂金の採取が始まっていたのです。ヨーイナ川（現在の米代川）の上流、コオサカ川という川の泥に含まれていたのです。源流には、とても良質な銅鉱石が眠っていましたが、その一部に金が含まれそれが砂金として川に流れ堆積していたのです。

イマキレは、金の価値をすでによく知っていました。かつて交易船が難破したときに助けた商人からもたらされた情報でした。カイは、ミナセに告げました。

「これから、大事なヤクメでポーハイまで行く。必ず帰ってくる。それまで、クセリをたのむぞ。」

「わは、しんじとる。でも悲しい日々がつづくな。」

「だいじょうぶじゃ。アカガミさまが、ずっとついとるからな。」

セイジャも、ミマナに話しました。

「ひとときのハナレじゃ。ようやってくれ。」

金髪のアイナイが雰囲気を感じたように、セイジャに飛びつきます。セイジャは、膝をついてしっかりと抱きしめました。アイナイの眼に涙が浮かんでいました。セイジャは、ゆっくりとアイナイのあたまをなで

「だいじょうぶじゃ、だいじょうぶじゃ。」

と繰り返しました。

アイナイは、セイジャの腕の中でいつしか眠っていました。

出発の前日、ある場所で、ある会話が交わされていました。

「この隙を、狙うぞ……。」

「大勢でかかれば、一時（いつとき）もかかるまいて……。」

それは、高台から湾を見つめていた二人の男の会話でした。不穏な動きがあったのを知らずに、青龍と白虎は、静かに遠賀（とおが）湾を出発していきました。村人たちの盛大な見送りを受けながら。そして、あの事件が起こるのです。

カイとセイジャが青龍と白虎に乗って渤海に向けて出発してから数日後のことでした。武装した男達、十人ほどが寒風山（さむかぜやま）の麓（ふもと）を、遠賀（とおが）湾をめざして駆けていました。

「これから、遠賀（とおが）の村を侵す。エモノは、砂金じゃ。」

カシラとおぼしき、剛髭のものが指図をしています。

「先鋒の間者（かんじゃ）によると、オサのイマキレが邸（やしき）に砂金を詰めた壺があるそうじゃ。夜明けにあわせて入（い）る。」

「手向かうものは、どうするか？」

「斬って捨てよ……。」

寒風山（さむかぜやま）の麓（ふもと）から、遠賀（とおが）湾までは、30里（約15キロメートル）、途中にある八望聚（やぼうじゅ）という峠を越えてから、目瀉という谷を渡ったところに湾はありました。谷には、70尺（約24メートル）の吊り橋が掛けてありました。そこが村の入り口となるわけです。

連中は、八望聚（やぼうじゅ）という峠に達していました。月は、十四夜。煌々とした明るさが遠賀（とおが）湾を照らし出しています。「あの北の湾口（わぐち）にあるのが、オオタイワじゃ。オオタイワから東に半里（約250メートル）走ると、イマキレが邸じゃ。真ん中の建屋が、母屋になっている。」

あと4里（約2キロメートル）というところで、東の山の端が、明るさを帯びてきました。夜明け前です。実は、彼らもエンチュ（蝦夷）の民でした。遠賀（とおが）の村から、東に100里（50キロメートル）ほど離れたモリイヤマのムラビトでした。

エンチュは、現在の東北地方から北海道まで各地にムラをつくって生活していました。でも、必ずしもすべてのムラが友好関係にあったわけではありません。モリイヤマには、イマキレがサイゴクと交易を結ぼうとしていることは伝わっていたのですが、参加を求められることはありませんでした。そのため、自分らがいないがしろにされたという意識があったのです。

一方でイマキレは、大海（おおうみ）を渡るような大航海に、ヤマドゴ（内陸に住むもの）を乗せたくなかったのです。船酔いに苦しむのは、目に見えていたからです。いつの世もコミュニケーションは難しいものです。

東の空が、ずいぶん明るくなりました。十四夜の月も、輝きをずいぶん弱めていました。連中は、目瀉に架かる吊り橋を渡り始めました。

先頭が橋の中央部にかかったときです、最後尾が橋に足をかけた瞬間……。吊り橋の母綱（はずな）が、不意に切れたのです。二本ある母綱の一方が切れたとたんバランスが崩れ数人が足を踏み外しました。そして、つぎに子綱も先端から切れました。男達は、悲鳴をあげながら、谷に落ちていきました。谷の深さは、80尺（約28メートル）、下では、岩が立っています。

助かったものは、いないようでした。

「ムゴイことをしてしまったかの……。」

イマキレのつぶやきに、他のものが声をだすことはありませんでした。

「恨まれることは、していなかったつもりじゃが……。」

遠賀（とおが）の村人たちは、無言で頷きました。

「それにしても、カイが残したフミのとおりじゃった。なにもせずば、我々は討たれ、キンは奪われ、アイナイとクセリが質に捕られると。アカガミさまのお告げだとあったな。

やはり天からみておられるのか……」

夜があけてから、イマキレ達は、谷の底に向かいなきがらを収容し、砂浜の一角に丁寧に埋めました。天のほうから数人の小さな声が聞こえましたが、イマキレ達には、聞こえませんでした。

「……ティーディーしちゃったかな。……」

「……これって、まずいんじゃないの。……」

「……コマチの出自（しゅつじ）が変わっちゃうよ……」

「……ちょうど、100年前だよ……」

カイ達の舟は、ポーハイ（渤海）まで、200里（約100キロメートル）まで迫っていました。そして、夢を見ながらこの声を聞きました。でもいつものように目覚めてからは、すべて記憶になかったのです。

その日は、とても暑い日でした。青龍と白虎は、3枚の帆に東南風をはらんで、洋上を進んでいきます。カイとセイジャは、漁師としての経験から夏に東南風が吹くことをよく知っていました。

この時期に日本から大陸に渡るのが最良の選択だったのです。晩秋から初冬は、逆に西北風が吹きます。これを利用すれば、大陸から日本に行けるわけです。

そして、ついに見えました。遠賀（とおが）湾を出発してから5日目のことでした。うすぼんやりと大陸が見えたのです。しかも見覚えのある景色です。ふるさとのイツラワンから、北に20里（約10キロメートル）ほど行ったところでしょう。

先頭の白虎に乗り組んでいたカイが、船尾に走りました。青龍にいるセイジャに向かって大声で叫びます。

「見えたぞー……！！！」

セイジャも手を振って答えました。

「こっちもじゃあー……！！！」

声はずんでるのがよく分かります。

カイは、だいたいの場所が確認できたので、山立てをしながら洋上を南下しました。そして二時間ほどで、ついには故郷（ふるさと）のイツラワンが見えてきました。もちろん、沖合に青龍と白虎を停泊させて、小舟を降ろします。

小舟は2艘でした。舟師（舟長）のルリベとカイナ、そしてカイとセイジャが乗り組んでいます。

イツラワンは、現在のロシア領ウラジオストクに近い入り江にありました。そして、ここから首都の忽汗城（現在の中国黒竜江省牡丹江市）までは、200キロメートルほどの距離になります。

小舟を待ち構えるものたちがいました。沖合に大型舟がみえたので、検曾於吏（警察）が、浜までやってきていたのです。

カイ達は、砂浜に舟を引き上げました。そして、検曾於吏の前に進みました。

「オマエたちは、どこからきたのか？」

と聞かれたときに、カイとセイジャは、驚きました。

セイジャの幼なじみムルンバイだったのです。

「ムルンバイじゃないか。」

「セイジャ！ カイ！ おまえ達は、漁に出たまま戻らなかったと聞いているぞ。」

「ヤマトまで流されて助けてもらったんじゃ……。」

「よく、帰ってきたなあ。オマエたちの家族も元気じゃ。」

舟師（舟長）のルリベが、ムルンバイの前に歩み寄りしました。そして、セイジャに目配せをして通司をしてもらいました。

「われは、東のクニからやってきた。交易をするためにだ。王に会わせて欲しい。」

ムルンバイは、答えました。

「王は、ここから400里（200キロメートル）ほどのところにいらっしゃる。だが、まずは、領府の長に挨拶がいる。土産はあるのか？」

ルリベは、竹筒をとりだし、その蓋をあけました。

そして手のひらに黄金色の結晶をとりだしました。

「黄金か？」

「いや、銅（あかがね）じゃ。恩荷（おんが）では、沢山採れるのじゃ。」

あえて、砂金のことは話しませんでした。王にあったときに切り札として使うつもりだったのです。

それは、キャルコパライトと呼ばれる鉱石でした。現代のコトバでは、黄銅鉱と呼ばれ、銅と鉄とイオウでできています。一見金塊のように見えますが、実はごく微量に金と銀を含む場合もありますから、金だと言ってもまったくウソではありません。たぶん、読者のみなさんも、どこかの博物館で見たことがあるかもしれません。

「よし、わかった。領府長に話す前に、自分の上司に報告する。ついてこい！」

4人は、ムルンバイについていきました。

とそのとき、母のアンニと妹のトゥリヤ、幼い弟のキータイが、見えました。カイとセイジャは、すばやく駆け寄りって母のアンニのところにひざまづきました。アンニの目に涙が浮かんでいます。

妹のトゥリヤは、セイジャの肩に抱きつきました。弟のキータイも、カイに肩車されています。

「よう、無事じゃったな……よかった……よかった。」

ムルンバイとルリベとカイナもその光景を微笑みながら見えています。そして、しばらくしてから、彼らを促しました。

「これから、領府長に挨拶に行く。今晚は一度家に戻れるように頼んでみる。夕方まで待っていてくれ。」

そして、カイ達は、一度舟に戻ると身支度を調べてから検曾於吏所に向かったのです。舟師（舟長）のルリベとカイナは、舟に戻り、翌日の領府長との会見に備えました。

夕方になり、カイとセイジャは、久しぶりに我が家に帰ってきました。弟のキータイも13歳になってずいぶんと体が大きくなっていました。いまでは、従兄の舟で漁師の見習いをやっています。

妹のトウリヤも、とても美しい娘になりました。亜麻色の髪がとても似合っています。母のマナニが、とてもほっとした表情で、椀に粥をよそって、セイジャとカイの前に並べました。

キータイが話しました。

「あの日、丘の上から見ていたんじゃ。アニジャたちが流されるところをな。」

トウリヤが続けました。

「すぐに、ムラオサのところに助けを求めにいった。でも、戻ってみるともう見えなくなっていた……。キータイが泣きじゃくっていた……。」

「心配かけてすまなかった……。」

セイジャが二人のあたまをなでています。

母のマナニが、二人に尋ねました。

「よう帰ってきたな。でも東のクニでもオノレを必要としているんじやろ。」

少し悲しそうな表情です。

「妻をめとって、子どもできた。」

「こっちは、心配せんでええ。トウリヤもキータイも稼いでくれとる。」

「これは、少しじゃが……。」

と、セイジャが、革袋から銅（あかがね）を取り出しました。おそらく数ヶ月分の収入に相当します。

「夏にヤマトからボーハイに渡る。冬の初めにボーハイからヤマトに渡る。毎年、行ったり来たりするつもりじゃ。」

交易がさかんになれば、想定できることでした。

「オマエの子の名はなんという？」

「アイナイという女の子だ、エンチュのことばであざみの花という意味じゃ。」

「それは、良い名じゃなの。」

次に、カイの方を向きました。カイは聞かれる前に答えました。

「クセリという名じゃ、勇者という意味じゃ。」

「おおきくなるのが楽しみじゃのう……。」

「アイナイは、ハハジャにそっくりだで。クセリは、テヤに似とるぞ。」

その日は、日が暮れてからも異国の話で盛り上がりました。

翌朝、日が昇ってすぐに、舟師（舟長）のルリベとカイナがやってきました。舟には、最低限の見張りを残して、水手（かこ、漕ぎ手）たちも降りてきました。今日は、6日振りの陸上（おか）でのんびりします。

イツラワンは、商品の中継基地の役割も担っていたので商人の行き来もずいぶんとありました。今日は、10日に一度の市が立っていました。

ヤマト朝廷は、初めて和同開珎（わどうかいちん）という通貨を鑄造しましたが、まだエンチュの民にまでは流通していません。それに和銭が鑄造されたことはまだ中国・渤海には知られていませんでした。だから市では、物々交換になります。

クルミヤクリは、喜ばれました。干し柿もです。でも市で一番人気が出たのは、毛皮でした。恩荷（おんが）の山中に住むウサギ、リスから良い毛皮が穫れたのです。

舟師（舟長）のルリベとカイナは、カイとセイジャを伴って、領府長との会見に向かいました。そして、領府長からある提案をうけたのです。

領府長は、ヤリツキベという名でした。渤海の王、文王の縁者でした。

領府は、石造りの堅牢な建物で、広さは、500坪ほど。周囲を高さ7尺（約2.5メートル）の郭墻で囲まれています。

奥の接応室に通されました。中には、片側5人掛けの机が備えられています。早速、扉に近い方からカイ、ルリベ、カイナ、セイジャの順で座りました。少し経ってから、領府長ヤリツキベが二人の従者と供に入ってきました。唐の高官のような服装です。このころ渤海は唐に恭順する姿勢を示すために使節を頻繁に送り、文王は、唐から渤海国の王の字（あざな）を賜っていました。

ヤリツキベが、口を開きました。

「オマエ達が、エンチュの民か。それで、土産はなにか。」

「このたびは、閣下にお目にかかれて、嬉しく思います。土産の品にございます。」

カイとセイジャが木箱を開けました。毛皮が数10枚入っていました。

「おう、これは見事な毛皮だ。」

手にとって、首に巻いたりしています。

「これだけか！」

ルリベが、竹筒を取り出して蓋をあけました。キヤルコパライト（黄銅鉱）です。ヤリツキベの目が光りました。

「オマエ達は、砂金も持っているであろう。王への貢ぎ物としてな。」

ルリベとカイナが顔を見合わせました。

そして、大きく頷くと、革袋を取り出して、机の上に広げました。まばゆい砂金は手のひらに一

杯ほどもありました。

実は、ヤリツキベは、鉱山技師でもあったので、キラルコパライトがあるところに当然、金も産出すると知っていたのです。

「ワレラは、金の鉱脈を知る術（すべ）を持っている。オマエ達が、案内（あない）すれば、産金の量は、数倍になるだろう。」

つまりは、金山開発に手を染めたいという意味でした。そして、翌年の帰路にあわせて、渤海の舟が2艘用意されることになります。会見が終わり、ルリベがやれやれという表情をしていました。

「しょうがないな。奴らを連れて帰るしかないだろう。」

カイナも相づちを打ちました。

「クニのチカラが違う。従うしかない。」

セイジャとカイも頷きました。そして交易の約定をとりつけてから帰国することになったのでした。

（第一部渤海編 了）

【第二部現代編】

【秋田美人の秘密 第二部 現代編】

舞台は、2020年にとびます。

国立青葉大学の秋田キャンパスは、秋田市と男鹿市の間地点、天王市にありました。

物理考古学講座の海老名教授は、研究室で助教の泉 新（いずみあらた）と話をしていました。

「泉君！ どうも、正史と違うような気がするねえ。」

「そうですね。どうもティーディーが何回かあったようです。」

「でも、ティーディーのトリガーってほとんど分からないからなあ。」

「そうですね。ごく矮小な現象がトリガーの場合もありますからね。」

ティーディーとは、Time Desperation の略で、時の流れが乱れた状態のことをいいます。つまりは、

時の流れが2つあるいはそれ以上に分裂することを指していました。

この時代には、タイムスコープという装置が開発されていました。簡単にいうと過去を見ることが出来る装置です。これは、光の速度を越える粒子が発見されたことによりました。

2011年にニュートリノが光速を越えたということが話題になりましたが、翌年、観察方法に問題がみつきこれは誤りとされました。

ところが2013年に青葉大学の瀧音（たきおと）教授が偶然に発見した粒子が光の速度を超えていることが分かり世界中が大騒ぎになりました。教授は、もちろんその粒子にタキオンと名付けました。

タイムスコープの原理は、こういうことです。たとえば、地上でリンゴが木から落ちたとします。リンゴが落ちたという画像は、光の速度で四方八方に拡散していきます。だから、一年前の画像は一光年先にあるわけです。

光より速い粒子があれば、その画像を先回りして捕らえ、地球に送り返すことで一年前の出来事を眺めることができるわけです。

この装置は青葉大学で開発され、その最初の使い手が物理考古学講座の海老名教授だったのです。彼らは、あるプロジェクトを開始して次々に新しい事実が判明していきました。

泉 新は、これまでわかったことを整理してみました。

・703年頃（渤海建国から5年）カイとセイジャの兄弟が漁をしているときに嵐に見舞われ遭難します。彼らは、5日間漂流したあとで蝦夷（エンチュ）の舟に救われたのち、恩荷半島（男鹿半島）のエンチュのオサであるイマキレのもとで暮らし始めます。

・704年 エンチュとヤマトは、数10年にわたる争いをしていましたが、ヤマトから使わされた秋田柵の国守（クニモリ）、和田綱（わだのつな）が 停戦を申し入れてきました。イマキレは好機ととらえ、再びイクサになるまえに国力を蓄えようと渤海との交易を目論みました。

そしてカイはイマキレの娘ミナセと、セイジャはその姉のミマナと結婚しました。カイとセ

イジャは、紅毛碧眼で長躯。現代でいうヨーロッパ系の顔立ちで身長も190センチメートル近い美男子でした。

・705年、カイとミナセの間にクセリという男の子、セイジャとミマナの間には、アイナイという女の子が生まれました。クセリは手足が長く、アイナイは青い目で亜麻色の髪でした。カイとセイジャは、漁師としての腕が立つだけでなく、舟の設計技術にも長けており、イマキレが提唱した渤海との交易舟を2艘作りました。

・706年 交易舟は、青龍と白虎と名付けられました。そして日本海を渡り、渤海の港イツラワンに到着し、領府長のヤリツキベと交易を約定しました。

ヤリツキベは、恩荷半島で金が産出すると踏み、鉱山技師を派遣しようとしています。

ここまでがタイムスコープからわかったことです。

タイムスコープは、光の速度を超える粒子タキオンを加速して、ある方向にビームを送ります。実は、太陽系は、天の川銀河の中を秒速220キロメートルで周回しています。

つまり、705年当時に太陽系があった場所は、逆算すればその場所が特定できるわけです。

ビームの変調係数は、1年/1週間に設定していました。つまりカイとセイジャの1年を、1週間で観察できたのです。このプロジェクトでは、小野小町（おののこまち）に至るまでの100年間を探ることになっていたので100年間を探るのに100週間（約2年）が必要でした。

2日後、泉新は教授室に電話をしました。あることが判明したからです。

秘書の下村麻衣子さんが、電話口にでました。

「教授の i-Cal（スケジューラ）に相談依頼たてたけど、回答もらってないんですよ。」

「ちょっと、書き物してるようですから、聞いてきますね・・・。」

教授は、来月の物理考古学学会の年次総会で講演することになっているはずだから・・・時間ないのかな。

下村さんが、いつものように穏やかな口調で、

「14:00からちょっと時間とれるよ。っておっしゃってました。」

「わかりました。その時間に何うとお伝えください。」

今は、13:00をちょっと過ぎたところです。

あらためて、プロジェクトの目的を振り返ってみました。秋田の女性は、色白さが際立っているという事実があります。秋田県内の研究者で湯沢市の医師、S博士の研究成果によると以下のことが判明したそうです。数千人に及ぶ女子高生の皮膚の色調を調査したところその白色度は、日本人の平均が約22%、西欧白色人種約40%に対し秋田県的女子高生は、約30%という結果が得られたということでした。もちろん美人の条件は、肌の白さだけではありません。でも白い方が美人として評価されやすいのも確かでしょう。

いろいろな説があげられました。紫外線量が少ないから日焼けしてないという説は、秋田県が日本で一番紫外線量が少ないという事実からでした。確かに紫外線量が少なければ、メ

ラニン色素の量も少なくて済むことから、その形質がだんだんと増えてきて色白になったということもあり得ます。

常陸の佐竹義宣が徳川家康から出羽に国替の命を受け（1607年）出羽（秋田）に入った際に国中から美女を連れてきたという説もあります。

また帝政ロシアの時代に難破したロシア船の船員が男鹿半島に住みついてその子孫がルーツだという説もあります。

でも計算してみると遺伝的形質が固定されるには、期間が短すぎるためどちらの説も根拠が薄いとされました。

泉新が目にしたのは、秋田大学のN博士の説でした。それは、西暦720年頃、日本と渤海国の間に親交が生まれ、なかでも渤海からの使節が何度も秋田に逗留し、そういうなかで混血が進んでいったのではないかという説です。

彼は、最新鋭のタイムスコープが備えられている青葉大学秋田キャンパスの新プロジェクトに応募しました。

それが、「モーティベーション・コマチ」でした。コマチ（小野小町）のルーツを探りたいという意味です。彼の仮説はこうです。

- ・渤海と親交が始まる前に、偶然、渤海から秋田にやってきたものがいた。
それがきっかけで親交が始まった。
- ・親交が深まるにつれ、渤海から秋田に使節が頻繁にやってくる。
逆に日本も遣渤海使（けんぼっかいし）を使わした。
- ・秋田に住みついた渤海人とのあいだに混血が進んだ。
- ・そして数世代経てから810年小野小町（おののこまち）が生まれる。色白で絶世の美人だと後世に謳われる。渤海人との混血の子孫だろう。

応募した中でとてもユニークな案件だったのですが話題性を追いすぎるということで最初は評価されません。でも新しい観光資源を探していた秋田県の後押しがあってプロジェクトとして採択されたのです。

プロジェクトは、半年間の準備の後に開始されました。シナリオをいくつか用意して実現可能性をシミュレートしました。そして698年の震国（後の渤海）の建国にタイムスコープの照準をあわせました。

偶然海からやってくるためには、漁師が流されて秋田にたどり着くというシナリオがもっとも可能性が高いとされたのです。

そして見つかったのがカイとセイジャでした。

そろそろ14:00に近い時間です。教授室をノックしました。秘書の下村さんが、ニッコリと微笑んで案内してくれました。

教授は、先にソファにかけると、

「まあ、かけたまえ。」

「失礼します。」

「それで、ティーディー（タイムディスパレーション）の時期と内容がわかったのかな？」

「じつは、ちょっとやっかいなことが・・・」

ティーディーは、時の流れが乱れた状態のことをいいます。つまりは、時の流れが2つあるいは、それ以上に分裂することを指していました。

物理考古学が始まってまだ3年しか経っていません。世界中で稼働しているタイムスコープは、8機だけでした。

さかのぼる年代が古いほど技術的にも難しくなります。プローブ（探査線）としてのビームを遠くまで飛ばす必要があることと信号自体が微弱になってしまうためでした。

現在、世界で最高性能は、青葉大学秋田キャンパスにある”あきたびじょん”です。これは1500年前までさかのぼることができます。

もちろん小野小町（おののこまち）の探索に使われることから命名されたのです。これを越えるものとしては、ヨーロッパで開発途上の”ジーザス”がありました。キリストの誕生から処刑、復活までを確かめようという意図です。完成すれば2100年前を観察することができます。

さかのぼれる年代は、同時に使うビームの数によって決まります。微弱な信号を複数束ねることで鮮明な画像を得ることができるからです。ただし一本のビームを発生させるには、数キロワットの電力が必要でした。1500年前までさかのぼるには、数千本のビームを束ねます。必要な電力は12メガワットにもなりました。

ヨーロッパの”ジーザス”は、あまりに膨大な電力を消費するために、第一段階では、連続的な画像ではなく一月ごとのスナップショットを取ることを目標としていました。これであれば、電力消費はずいぶん抑えられることになります。

さて、場面は再び、海老名教授室に戻ります。

「実は、信号に外乱があったような兆候がみえるんです。先生もご存じのように外乱にはいくつかの要因があるんですが・・・。」

「ひとつは、電磁気的な擾乱（じょうらん）だよ。ふたつめは、重力場によるひずみ。そして三つめが、人為的なマルチプレックスタキオンだな。」

電磁気的な擾乱は、たとえば太陽風の影響があげられます。太陽の黒点活動は、11年周期で変化しますが、その活動に応じて太陽風がおおきく揺らぎます。すでに太陽黒点にむけてタキオン（超光速粒子）センサーが常時監視を行っているので、太陽風がどのような挙動を示すかは瞬時に地球サイドでは観測できます。この影響を排除するには十分な計算時間があります。

重力場によるひずみは、3本以上のタキオンをとばしたときに戻ってくるビームの偏角をみることでそのひずみの大きさが評価できます。通常は、ブラックホールが数10光年以内にあると有意な影響がでると言われています。もちろん正しくその偏角の補正をすればタイムスコープは大丈夫です。

問題は、三つめのマルチプレックスタキオンです。すでに彼は何回か経験しているのですが、あきらかに妨害行為と思われる現象です。たとえば1300年前に送ったタキオンビームの戻りパターンにそれと逆位相のパターンのビームをしかけると見かけ上、信号強度がゼロになってしまいます。

これは、あきらかに悪意のある第三者がやっていることだということが、最近分かってきました。ひとつの技術がその国の経済的な優位性を高めるとすれば、それを抑えようとする勢力は必ず現れるものです。調査が始まっていましたが、いまだにどの国がそのような逆位相のビームを仕掛けているのか全くわかりませんでした。

「泉君。それで、実害は？」

海老名教授が泉新に聞きました。

「ミマナとアイナイをロストしました。」

ミマナは、娘のアイナイと一緒に住んでいるはずでしたが、追跡用のタグが見あたらないということのようです。現地は722年。アイナイは14歳になったはずです。

「セイジャは？」

「6回目の訪渤で、カイと一緒に渤海にいるとのことでした。」

「そうか。そこから紐をつけるわけにはいかないんだな……。よし、わかった。別のルートから情報をさぐるよ。ちょっと待っていてくれたまえ。」

教授は、秘書の下村さん呼びました。2020年では、SIRIKOというパーソナルデジタルアシスタントを使うのが普通でしたが、教授は生身の人間のほうがいいと言って私費で雇っているのです。

「下村さん、Bグループを招集しよう！」

「かしこまりました。」

下村さんは、教授の意図を理解してBグループのメンバーの招集にかかりました。スケジュール調整のスキルは、まだSIRIKOは、人間に及ばないのです。

泉新（いずみあらた）は、妨害行為の動機を考えてみました。このプロジェクト”モーティベーションコマチ”は、純粋に学問的な研究で経済性がからむ部分は思いつきません。もちろん、小野小町（おののこまち）の動画を手に入れば、それなりの価値はあるでしょうし、公的資金を使っている以上、YouTubeで公開されることになっています。

すでに著名な歴史上の人物は、過去1000年にわたって動画が収集され、だれでも見ることができるようになりました。日本では、1854年に撮影された写真がもっとも古いといわれて

います。ということは、それ以前には肖像画しか残っていないわけです。

最初は、江戸時代後期について検討が進められました。ターゲットは、1850年頃です。さかのぼる年代が古くなるに従って、画像再生が難しくなるのと同時に使う電力もうなぎのぼりになるため第一段階ではこの時代となったのです。

そのなかで選ばれたイベントは、1861年にあった和宮の武家への降嫁です。幕末の動乱のなかで和宮は天皇の娘として初めて武家へ嫁ぎます。このときの様（さま）は、小説やドラマでとても有名ですが、ここに注目したのは、その京都から江戸までの行列が3万人で長さが50キロメートルに渡ったという記録があったからです。

タイムスコープは、対象物に当たった光の反射による光子の分散を特殊なレンズで集光します。つまり光の当たっていないところは見えないわけです。

（その後、べつの原理による改良が行われますが・・・。）

この行列は、当然空から見渡せると同時にその長さから、ピントを合わせるのにとっても都合が良かったのです。

10月20日、和宮一行は京都の桂御所を出発しました。ルートは、中山道が選ばれました。東海道では、途中に川がいくつかあること、攘夷派による襲撃の恐れがあることが理由とされています。

11月15日 江戸城内の清水屋敷に入ります。この行列は、いろんな角度から映像を撮影することができて、その後のタイムスコープの改良に大変役に立ちました。音声情報を録ることができるようになったのです。たとえば、だれかがしゃべっている脇に壁があるとします。その壁は、音声で空気を振るわしその微小な振動が壁を揺らします。その振動は、反射した光子を変調させるわけです。簡単なAM（振幅変調）ですから、検波してLPF（ローパスフィルタ）を通すことで音声情報が得られるわけです。

その次は、1794年の写楽の登場とその正体の究明が行われました。21世紀に明らかになった資料から想定された人物が写楽と特定されました。

そして、1714年の江島生島事件。このとき江島と生島の密会は確認できなかったのですが、その評定の様子がいくつか漏れ聞こえてきたことで、世間の耳目を集め1ちゃんねるでは、大変な話題になりました。

1603年 出雲の阿国の登場。このとき初めて元祖、歌舞伎踊りがYouTubeに流れ、世界中の若者達がこぞってまねたことは記憶に新しいことです。

伊達政宗の青年期もとらえられました。その眼光の鋭さが、肖像画以上にカッコイイととても評判になりました。

泉新は、そこで豊臣秀吉について募集されたパブリックコメントを整理しているときに、おもわず膝をうちました。

「あったぞ・・・、これだったのか・・・。」

パブリックコメントは、タイムスコープで観察する対象を広く募集した際に寄せられたものでした。

海老名教授は、秋田キャンパスの共通棟にある3D会議室に泉新（いずみあらた）助教といっしょに座っていました。100平方メートルぐらいの部屋にラウンドテーブル（円卓）が据えられて20人ほどが座れるように椅子が置かれています。椅子の前には、3Dディスプレイが置かれ空中に映像が投影されるようになっています。10時から3D会議を行うのです。

参加者は、Bグループ。海老名教授が招集した面々です。

「泉君、エレジュメは何ページかな。」

「ルウトが、4ページで、サブデがその30ページぐらいです。それから・・・。」

質問内容に応じて、自動的に画像が中央の3Dスクリーンに映るようにしました。」エレジュメというのは、会議の時に配るレジュメを電子化したものです。参加者は、紙の資料をめくるように読むことができます。

ルウトというのは、今回の会議のテーマで、・問題点 ・仮説 ・検証 ・結果 ・考察 の順に書かれています。

サブデは、それぞれを補完する資料で、エレジュメの項目をタップしたりワイプしたりすることでその情報がとりだせます。

5分前になりました。ぞくぞくとメンバーがログインしてきます。世界各地から専用の光ファイバーを通じてアクセスしています。

今回、招集されたのは、通称Bグループつまり BackyardGroupe でした。マーケティング用語では、利益を生まない場所とか言われるのですが、彼らは、タイムスコープを支える重要な裏方で貴重なブレイン達でした。自分たちをBグループと呼んでいたのは、目に見えないところで働くという意味のクールなユーモアでした。

ログインしたメンバーは、実際に椅子に座っているように立体画像が投影されています。今回集まったのは、5名です。すべて若手の研究者、エンジニアでした。

「定刻になりました。みなさまお疲れ様です。それでは、最初にこの会議の目的についてわたしのほうから説明させていただきます。」

泉新は、ラウンドテーブルに腰掛けている参加者の画像に向かって話しかけました。

「すでにご存じの通り、ここ数ヶ月のあいだに、何度か起こりましたが、過去の情報を載せて帰ってくるタキオンビームに妨害が加えられています。それが、タキオンビームに逆位相のビームを足しあわせて原信号を減衰させるマルチプレックスタキオンであるということが明らかになってきました。逆位相の波を足しあわせると当然見かけ上の信号はゼロになってしまいます。そのためにモーティベーション・コマチで探っている重要人物をロストしてしまいました。現在のところ、コマチの4代前の祖先である可能性が一番高い人物です。われわれは、どうしてもこの妨害を排除する必要があります。」

海老名教授が続けました。

「この妨害工作は、なにものがどういう目的で行っているのか、まだはっきりしない。そのものたちを排除できればもちろん一番良いわけだが、今回は、彼らの目的がおぼろげに分かってきた。そこで、みなさんの知恵を借りて妨害工作に対抗したい。」

「それでは、彼らの目的と仮定したことをお話しします。エレジユメの1ページ目です。これまで、1850年代から徐々に古い年代を探ってきました。それが、あるキーワードで分類すると妨害工作が顕著な事象があったのです。それは、豊臣秀吉でした。もちろん豊臣秀吉は、日本の歴史上もっとも重要な人物のひとりであることは確かです。ここで注目したのは、秀吉が鑄造させた大判金です。天正長大判は、秀吉が彫金師の後藤家に命じて作らせました。現在でも世界最大の金貨とされています。その価値は、一枚数千万円から数億円とされています。秀吉の死後、大阪城には、莫大な金塊が収蔵されていたとされています。しかしながら秀吉が集めた金塊の量と散逸した金塊の量に大きな差があることが分かってきました。それは、家康が残した資料から判明したのです。まだ収蔵されている天正長大判があるらしいと。どうもこの大判を狙っているのではないかというのが私の考えです。」

教授が補足しました。

「モーティベーション・コマチでも同様の懸念がある。恩荷半島（男鹿半島）では、金はほとんど産出しないが、秋田県北部では、銀・銅とともに大量の金が産出した例がある。日本が黄金の国と呼ばれた所以だ。」

「ここからは、仮定なのですが、コマチの祖先が秋田県北部の金鉱を探し出して莫大な量の金を手にいれたのではないかと考えています。妨害工作は、このあたりを公にしたいくないために行われているのではないかと考えています。」

「質問いいでしょうか？」

若手のエンジニアでタイムスコープの設計者の一人、但馬光也が発言しました。泉新がうなずくと但馬が続けました。

「マルチプレックススタキオンを作るには、我々よりも高度なエレクトロニクスが必要です。地球上にほんちに存在するのでしょうか。」

「すでにヨーロッパ連合の”ジーザス”の出力は、われわれの”あきたびじょん”の数10倍に達しています。この出力のすべてを変調できれば、あきたびじょんを消すだけのマルチプレックススタキオンができるのではないのでしょうか。」

と泉新が答えました。

但馬が指摘しました。

「自分の計算だと、変換効率が0.1%~0.2%程度なのです。なにか大きなブレークスルーがないと無理のような気がします。」

「ということは、あの可能性がでてきたということじゃないのでしょうか……。」

精鋭の物理考古学者である萩原有美がつぶやきました。全員の注目を集めました。そして萩原が驚くべき情報を話し始めたのです。

「みなさん、ここに資料を用意してきました。ご覧下さい。」

各人の手元に新しいエレジユメ（電子版のレジユメ）が配られました。

「マルチプレックススタキオン（重ね合わされた超光速粒子の信号）の、技術的な位置づけをしてみました。」

萩原の用意した資料は、3次元のグラフでした。

縦軸には、技術的な難易度。

横軸1には、年代。

横軸2には、場所。

それぞれが直角に交わっています。

「このグラフは、1990年から2040年までのタイムスコープに関する技術開発の動向を記したものです。」

他のメンバーは、中央に映し出されている3次元のグラフを注視しました。

「今年（2020年）までの技術動向をプロットしています。この3軸の中から横軸に年代をとって縦軸に技術的な難易度を対数グラフでとるとこのようになります。そして、マルチプレックス技術が実現される年代を評価しました。」

一同は、息を飲みました。そこで示されていたのは、マルチプレックス技術が実用化される年代でした。それは、2035年、いまから15年後のことです。

萩原有美の説明に注目が集まりました。

「みなさんがご存じの通り1990年にタイムスコープの原理が発見されました。そしてだいたい9年ごとに技術的な集積が10倍になっています。つまり技術的な難易度が10倍のものが克服されていっているわけです。

そして……。

私は、マルチプレックス技術について国内外の研究者 数百名に問い合わせをしました。そして得られた結論は、実現されるのが2035年±2年でした。つまりわれわれのタキオンビームは、未来からのジャミング（邪魔すること）によって妨害されていると考えられます。

2035年になると技術的な集積が今より50倍程度になると考えられます。これは、現在のヨーロッパ連合の“ジーザス”でも全然足下にも及ばないレベルです。結論を申し上げますと、現在の地球に存在しない勢力が妨害をしているということです。」

一同は、ざわめきました。泉新がちょっと興奮気味に尋ねました。

「横軸に年代と縦軸に地域をとるとどうでしょうか？」

質問の意図は、それがヨーロッパ連合に由来するのか、それとも他の国なのかということでした。

「確実なことは言えません。地域オリエンテッドなパラメータは、計測精度が低すぎるのです。」

つまり15年後に研究のイニシアチブをとっている地域が明確ではないという意味でした。

海老名教授がちょっと顔をしかめながら意見を述べました。

「ちょっと、自分には心当たりがないわけでもない。ただしここで話すには、根拠が不足だ。」
泉新が教授の方を向いて、

「先生！ ヴォイスレコーダをちょっと止めますから……。」

泉新が、SIRIKO に向かって指示を出しました。

「ヴォイスレコーダを停止。再開は指示あるまで待つこと！」

SIRIKOは、ご存じのように音声認識で指示を理解して実行する秘書ロボです。3D会議室のコ

ンピュータに泉新のSIRIKOが認証されているのでこのような指示が可能なのです。会議が終わると同時に議事録ができてくるのですがこの作業を一時取りやめにするという意味でした。

「そういうことならオフレコでちょっと話そうか・・・。」

海老名教授が続けました。

「それは、8年ほど前にさかのぼる。2012年のことだ。2012年は、地球人類が滅亡するというウワサがまことしやかに流れた。でも、それは誤りだった。滅亡するとされた12月22日以降も人類は生存している。」

教授が何を話そうとしているのか、まだ泉新にもBグループの面々にも理解できない様子です。全員が教授を注目しています。

「当時は、タイムスコープが実現できると考えていたひとは少なかった。それは、光より速い物質つまりタキオンが発見される前だったからだ。そんなときに一人の研究者がいた。彼は、タキオンの発見に全力を注いでいた。毎日、毎日、自分の理論をインターネットで宣伝し続けた。スポンサーになってくれる人物を探すためだ。ある日、そんななかで一人の男が現れた。スポンサーになってもいいという。そしてあの事件が起きたのだ。」

といいながら、海老名教授は少し苦悩の表情を浮かべました。

「それは・・・。」

と教授が言いかけたとき、けたたましいベルの音で一同が天井を見上げるとそこから膨大な量の水が降ってきました。室内のスプリンクラーが作動したようです。火の手は見えません。あきらかに誤作動でした。

回線に水が掛かったために室内の電子機器類がダウンしました。特にPAシステム（放送システム）は、電源部がショートしたらしく黒い煙が上がっています。放水は2分ほど続きました。

会議に参加していたメンバーは、すべてログアウトを余儀なくされて三次元画像はすべて消え部屋に残ったのは、海老名教授と泉新だけでした。

二人は顔を見合わせ同時につぶやきました。

「やられたな。」

「盗聴されてましたね。」

ドアをけやぶって警備員が2人入ってきました。

「教授！ 大丈夫ですか？」

「ボクも泉君も大丈夫だ・・・。」

「他に被害は？」

「三次元投影システムとPAがやられたようだ。」

「あとでお話を伺うと思いますのでよろしくお願いします。」

警備員は、被害状況を確認してから部屋を出て行きました。

「泉君は、どう思う？」

海老名教授は、ちょっと憔悴した表情で尋ねました。

「先生、妨害している組織についてキチンと話してもらえませんか？」

「わかった。でもここではまずい。電波暗室に行こう。」

秋田キャンパスの共通棟に隣接したエレクトロニクス棟には、電波暗室があります。内部からも外部からも電波が遮断されています。通常的手段では絶対に盗聴は不可能でした。

二人は、濡れた衣服を着替えてから電波暗室に向かいました。電波暗室は、円形の部屋で天井が半球形になっています。ちょうど天文台のドームのようなイメージです。直径が10メートルほど、広さは80平方メートルぐらいでしょうか。部屋の内部には、フェライト系の特殊コーティングがなされ、内部で発生した電波を吸収するとともに外部から入ってくる電波を遮断することが可能です。

中央にテーブルがありそこに実験用の機材が据え付けられるようになっています。外部からは、情報系は光ファイバー、電源はメタルケーブルで導入されています。電源ケーブルは、バッテリー型のローパスフィルタを経由して入るので外部からは情報収集ができないように厳重に管理されています。

二人は、テーブルに向かい合うように座りました。試しに携帯電話で外部に電話をかけてみました。当然、電波が届かない旨の表示がでました。

「あれは、ぼくが国立横浜大の助教授のときだった。君も知っているとおりに、大黒英一先生のところで、宇宙空間における歪曲場の研究をしていた。」

”宇宙空間による歪曲場”というのは、ブラックホールのようにとてつもなく大きな重力がかかるような場所には、光の速度が不変であるという原理が適用できないという理論です。その研究がその後タキオン（光速を越える速さをもつ粒子）の発見につながります。

「2011年、研究室にとっても優秀な院生が2名いた。ひとは博士課程の今給黎（いまきいれ）陽一郎、もう一人は修士課程の小田摩里亜だった。彼らは、最先端の歪曲場理論を吸収してタイムスコープ理論をさらに発展させた。あとは、タキオンが発見できれば実証実験が可能というところまでこぎつけた。ここまでは、論文が公開されているから知っているひとも多い。そして、今給黎（いまきいれ）が一般相対論の式から導かれるチャンドラセカール解を別の観点から調べなおしたとき、あることに気がついた。タイムスコープで物質を運べる可能性だ。そうタイムマシンの原理を発見したんだ。今給黎（いまきいれ）はすぐにぼくのところに報告に来た。式の展開を目で追ったぼくは、すぐにとてつもない発見だということに気がついた。そして二人で大黒教授室に向かった。」

泉新は、当時のことを思い浮かべていました。まだ学生のころです。こういう発見があったとは、まったく知りませんでした。

海老名教授が続けました。

「大黒先生は、報告を聞くと喜ぶ様子もなくすぐに沈んだ顔になった。そして、このことは、し

ばらく発表するのを控えよう。これを知っているのは君たちだけだよなと念を押した。実は小田摩里亜もすべての内容を知っていた。毎日のようにディスカッションしていたからだ。それに彼女は、工学的な展開ができないかどうかまで考察を加えていた。」

「なんで、大黒先生はそんなことをいったんですか？」

「ムラの閉鎖性のためだ。大黒先生の恩師は、あの有名な大河内泰蔵先生だ。大河内先生は引退する前に、弟子達を集めて何人かにテーマを割り振った。その中で大黒先生にはタイムスコープ。そしてご子息の大河内達也にタイムマシンの研究を割り振った。大黒先生は、タイムマシンに手を出せない状況だったんだ。すでに大河内達也は、タイムマシンが10年以内にできるとあちこちで講演していたからな。」

「京西大の大河内達也先生は、そんなひとだったんですか。そんな理不尽なことは・・・。」

「固体内核変換の例を見てもわかるだろう。ムラに不利益な研究はつぶされるんだ。それが画期的であればなおさらだ。それに泰蔵先生は学士院の総裁まで務めたから研科費の配分は、好きなようにできたからな。」

「今給黎（いまきいれ）さんは、どうしたんですか。」

「彼がとった行動は、世論に訴えかけようとするものだった。最初は、新聞社、マスコミにメールを送った。でも、すでに手が回っていた。すべての情報がつぶされた。そして彼は、インターネット上にブログを開設して世論を喚起しようと思論んだ。でもインターネットも政府がプロバイダーに指示して情報を押さえ込んだんだ。」

「そして、彼のもとに一人の男が接触した・・・。 研究資金を提供しましょうと。」

「すでに研究室にいつらくなっていた今給黎（いまきいれ）は、すぐにそれに乗ってしまった。そして退学した。しばらくして小田摩里亜もあとに続いた。僕は、優秀な人材を失うことはとても残念だった。ちょっと嫌気がさしたぼくは、タイムスコープそのものの研究から離れてアプリケーションレベルのことを考え始めた。物理考古学という学問が成立しないか検討を始めた。つまりは、逃げだったわけだ。」

海老名教授は、少しつらそうな表情で話を続けました。

「そして10ヶ月後、教授に呼ばれてある装置を見に行くことになった。それは、タイムスコープの実験装置らしいという。場所は、甲府にある地下施設だった。そこには、教授とぼくの他に、武装した警察官らしいものが10数名いた。ものものしい厳戒態勢だ。そこは、甲府盆地を囲む山のひとつにトンネルが掘られさらにエレベータで50メートルほど降りたところだった。エレベータを降りると、さらにトンネルがありしばらく歩くといきなり視界が開けた。そこにあったのは、たしかにタイムスコープだった。巨大な電源装置、タキオン発生装置、変調機、送信機、受信器、大画面の液晶表示装置、分散型計算機システム（DCS）、マンマシンインターフェース。そして、半導体工場のエアーシャワールームと同じような透明なドアで仕切った部屋があった。」

”これは、確かにタイムスコープと入力用のコンテナだな。”

教授は、一語一語区切るようにつぶやいた。

”入力用のコンテナということは、タイムマシンじゃあないですか？”

思わず声をあげてしまった。これを作ったのは、彼らしかいない。そう、今給黎（いまきいれ）陽一郎と小田摩里亜だ。

科学警察研究所の所長、矢上警視が教授に説明を始めた。

”状況をお話しましょう。我々は、数ヶ月前からある団体の活動を追っていました。そして一週間前にこの施設をつきとめ、三日前に踏み込みました。蒼い詰め襟の服装の連中が10名ほどと白衣の男女が1名ずついました。詰め襟の連中とは、銃撃戦になり、装置の前に踏み込んだときには、白衣の男女がその部屋の中に入っていったのです。”

もちろん部屋とは、入力用のコンテナのことだ。

”そして、部屋全体が大きく振動してまばゆい閃光に包まれると白衣の男女は消えていたのです。”
そこで教授が質問した。

”詰め襟の連中とは、どういう？”

”狂信的な宗教団体です。世界的な広がりをもつ宗教で、信者数は世界で数千万人と言われています。”

これでだいたいのアウトラインはつかめたかな。」

と、海老名教授は、ふーっと大きなため息をつきました。

泉 新は、ちょっと思い出しました。2012年の6月ぐらいに、狂信的な団体が数多く現れました。12月22日に人類滅亡につながる脅威が地球を襲うという教義です。巨大な地震が連鎖して起こるとか、彗星の衝突があるとか、強力な耐性をもつインフルエンザが流行するとか……。

彼らは、自分らの教義を押しつけ、人々の不安感をあおり信者の数を増やしていったことを。そして2012年12月22日は、ことも無く過ぎていったことも。

海老名教授は、話を続けました。

「そして、われわれが装置の中身を調べようとしたときに大変なことが起きた。それは、矢上警視立ち会いのもとでDCS（分散型計算機システム）の電源スイッチを入れたときだった。起動音（ピポ！）とともにubuntu（ウブントウ：linuxのディストリビューションのひとつ。）が起動した。このPCは、DCSのコントロールを行う際のマンマシンインターフェースになっていた。そして自動実行ファイルが画面上に例の文字を浮かび上がらせたんだ。」

「それは、もしかして……。」

「そうだ。カウントダウンだった。□□分□□秒 という表示が15分00秒から14分59秒、58秒、57秒と変化していった。そして、その下の文字は、“爆破までの時間”と表示されていた。」

ubuntuは皮肉なことにズールー語で“他者への思いやり”という意味でした。

「ブラフ（はったり）の可能性もありますよね。」

「もちろん、その可能性もあると思った。本当に爆破するのであれば、彼らが退去する段階でやってもいいわけだ。でも、こうも考えた。彼らは、わざと技術力を見せつけようとしたのではないかと。そして、矢上警視が決断した。ともかく逃げることにしよう。すぐに地上に続くエ

レベータまで、総勢20名ほどでたどりついた。

でもエレベータの扉が開かなかった。」

「それは、侵入者を許さないということでしょうか。」

「すぐに、非常階段を探した。でも非常階段も嚴重に施錠されていた。時間が差し迫っていた。10分を切った……。そこで、改めて考えてみた。DCS（分散型計算機システム）が起動するとエレベータ制御も非常階段の扉の制御もDCS側に移るのではないかと。

そして、自分一人でDCSまで戻った。画面の右上にセキュリティというアイコンがあったことを思い出したからだ。それをクリックすると案の定、エレベータ制御という項目があって、赤い文字でドアクローズとなっていた。この項目をマウスクリックした。すると緑の文字でドアオープンに変化した。エレベータ前から、歓声が上がるのが聞こえた。

残りは、4分45秒だった。急いでエレベータ前まで戻ると、すでに1台目は、地上に向かっていった。待っていたのは、矢上警視だけだった。

すぐに2台目に乗り込んだ、地上まで40秒ぐらいか。タイムズアップまであと1分だ。そして、地上に到達するやいなや、クルマに飛び込んだ。クルマは、猛ダッシュでトンネル入り口から出発した。

”トンネル入り口からの爆風に気をつけろ！！！”矢上警視が叫んだ。

爆風は直進性を持つから、それをさけろとの指示だった。クルマが左側に進路を変えた瞬間、大きな地鳴りとともにトンネルからの爆風が横を通りすぎて行った。危なかった。振り返ると山の斜面が崩れ、岩石流がこちらを目指して迫ってきている。ものすごいスピードだ。クルマのスピードは、140キロを越えた。そして岩石流に飲み込まれようとした瞬間。さらにアクセルを踏みこんで、岩石流からはかろうじて逃れたんだ。山の斜面には、ぽっかりと100メートル四方の大きな穴が開いて、施設がすべて埋まってしまったことを物語っていた。」

「それは、たぶん……」

海老名教授は、泉新のことは遮って、

「そう、警告だったんだ。今後、タイムスコープもタイムマシンにも手を出すなという。」

「そうだったんですか。よく分かりました。でも、なぜいまこのタイミングで妨害を始めたんでしょう。」

「おそらく、彼らは2035年にいるんだろう。そこから各年代を監視して我々を狙ってきたんだと思う。」

「じゃあ、逆に言うといま我々が”あきたびじょん”というタイムスコープで画期的な発見をする直前だということですか。」

「ここで重要なことは、Time Desperation つまり、時の流れが2つ以上に分裂すると、お互い同士は見えなくなるということだ。しかし彼らが妨害しようとしているということは、ぼく達が生きていた時代の延長線上に彼らもいると考えられる。」

「それがパラレルワールド理論ですね。Time Desperationが起きると新しいタイムラインができていく。そしてそれらが並行して流れていく。」

「枝分かれに制限はないから、いくらでも分裂する。一本の枝から過去の幹にさかのぼること

は可能だけど枝同士はお互いが見えないんだ。」

「もしタイムマシンを使って過去を変えたらどうなりますか？」

「そう、そこがいつも議論になるところだ。でも、過去を変えてもそれは現在に影響は無い。そこがTD (Time Desperation) の起点になって枝分かれが生ずるからだ。過去に行って歴史を変えるような行為をした場合、その人間は、新しいタイムラインに乗っかることになる。だから、もとの世界に戻ることはできないだろう。」

「彼らが、スプリンクラーを誤作動させたというのは、物理的な行為ですから過去を変えたと言えるんではないですか。」

「それは良い質問だね。この答えは、その時点でTDが起きたと考えれば説明がつく。つまりスプリンクラーが誤作動したタイムラインと誤作動しなかったタイムラインに別れたんだ。そして、我々は、誤作動したタイムラインに乗っているし、彼らもだ。だからこのタイムラインでは、誤作動したことが歴史的な事実なんだ。これで矛盾はない。」

「そうであれば、過去を変えても意味はないんですね。」

「この質問に対する答えは、どういう視点でこの現象を見るかにある。」

「とおっしゃいますと……。」

「あの時点で、もうひとつのタイムラインが生じたと言うことは、そのほかにスプリンクラーの誤作動がなく、最後まで会議が続けられた新しい世界ができたということになる。そこには、もちろん泉君もぼくも存在するわけだ」

「わかりました。結局は、ヒトの主観というか意識がどこにあるかということなんですね。」

「そういうことだ。現在のタイムラインの意識のもとで別のタイムラインを評価しようとしても無駄なんだ。」

「ということは、僕、泉 新という存在は、この平行宇宙の中に無数に存在しているということですか。」

「だから、君の人生は、相当うまくいくタイムラインから絶望のどん底に苛まれるタイムラインもあるかもしれない。今年2020年に彗星が地球に衝突して人類が滅亡するタイムラインもあるかもしれないし、その間に全能の神が天から降りてきて人類を助けるというタイムラインもあってもおかしくない。」

「じゃあ、彼らの本当の目的はなんですか？」

泉新のいに海老名教授は、少し考え込んでから答え始めました……。

・。

「本当の目的はぼくにも見当がつかない。でも彼らが金（きん）に興味をもっていることは確かのような。最近わかったのが、スプリング16（シクステーン）という大型放射光施設で秋田の金山で取れた金鉱石と秀吉が鑄造した天正大判金の不純物を分析したところ

それは、ほぼ同じだということわかった。秀吉は、秋田の金山を開発していたという証拠かもしれない。そして、そのつながりが“あきたびじょん”で発見されるのかもしれない。」

泉新は、思いました。

たしかに金（きん）の価値は、人類にとって普遍だ。金を所有するということで社会的に大きな

影響力も持てるだろう。でもそれだけだろうか。うまくいえないけど、もっと違う側面を持っているような気がする。

海老名教授が、言いました。

「これから、秋田キャンパス長のところに行ってくるよ。全学でも注意を喚起するようにしないと。」

「理解が得られるでしょうか。今のところは、他に妨害工作があったようには聞いていないんですが……。」

「限定的な妨害なのか、それとも世界的に始まっているのかはわからないけれど妨害がこのタイムラインで実際にあったことは事実だよ。まあ、その辺も含めて説明してくるよ……。」

その日、泉新は帰宅してから妻のユカに今日起こったことを話しました。ユカは、秋北高校で日本史を教えています。物理考古学で探索している内容についてもよく理解していていい相談相手でもありました。

「金（きん）だけじゃないわね、それは。たぶんコマチは何か持っているんだと思うわ。

でも驚いた、タイムマシンが本当にあったなんて！」

「僕も驚いたけど、以前から言われてたことは確かだよ。タイムスコープ理論は、タイムマシン理論のサブセットだから、逆にタイムスコープ理論を拡張すればタイムマシンができるよね。」

「摩里亜さんが、かかわっていたなんてびっくりだわ。」

「えーっ！ 小田摩里亜ってひとを知ってるの？」

「私が考古学を勉強してたとき研究室によく遊びに来ていたのよ。教授の姪御さんだと言っていたわ。本業は、物理屋だけど考古学にも興味あるって……。」

「そうかあ、考古学に興味のある物理屋ってなんだか他人とは思えないなあ……。」

「そうそう摩里亜さんは、物理屋という側面のほかに生物学にもとっても詳しくった。ホントは、生物学を勉強して生体ロボティクスの研究をしたいと言ってた。事故で指を切断した人の細胞を培養して、新しい指を獲得できるようにって。高校のとき留学してたオーストラリアでクルマの事故にあって同乗していたクラスメートが指を切断したらしいの。その子はピアニストを目指していたのになら悲しそうに話していた。」

ユカは、話を続けました。

「でも、私が卒業する間にへんな噂を聞いたのよ。人類の行く末がどうのこうのっていう話をときどき研究室の後輩とかに諭すように話し始めるときがあるって。ある先輩と付き合ってるけどその先輩がとても狂信的な宗教にはまっていてその受け売りをしてるみたいだって。」

新（あらた）は、だいたい話が飲み込めました。ヒトは、ある時期に自分が生まれた意味を一生懸命自分に問いかけそれを探して悩みます。そんなとき明確に答えを言ってくれるヒトに出会うことがあります。ココロが弱っているときには、すーっと入り込んでしまいます。そして師と思いはじめ、あらゆることをまねし始めるようになります。それが悲しい体験を癒すものであればなおさらです。でも時としてその師があらぬ方向を目指しているのであればとても危険なことに

なります。いわゆる洗脳された状態です。たぶん小田摩里亜もそういう状態になってしまったの
でしょう。

でもユカの言った言葉が気になりました。

”コマチは、なにか持っている……。

生物学と物理学……

人類の行く末……

タイムマシン”

その秘密は徐々にあきらかになっていきました。

(第二部 現代編 了)

【第三部 燭光編】

【秋田美人の秘密 第三部 燭光編】

「泉先生！ ミマナとアイナイを再認です！」

タイムスコープ”あきたびじょん” のオペレータ、秋野 香奈（あきの かな）がちょっと興奮気味にしゃべりました。秋野は、大学院修士課程2年で物理考古学を学んでいました。実習もかねて

週に2回ほどオペレータをやっています。

「年代の特定はできたかい？」

「前回口ストしたときは、722年でしたけど、いまはですね、……。724年の夏ですね。」

「カイとセイジャは？」

「ええ、近くにいるようです。同調しました。」

「画像に出せるかな……………」

「やってみます。」

数分後に、セイジャとミマナ、娘のアイナイが正面のパネルに映し出されました。3人は、海岸で網の手入れをしているようです。画面を通して夏の日差しがまぶしく感じます。

アイナイは16歳、とても綺麗な娘になっていました。

「これだけ鮮明なのは、初めてです。泉先生」

「うまくいったなあ。これまで使ってたのは、フォトン（光子）のタキオン（超光速粒子）だったけど、今回初めてエレクトロン（電子）のタキオンをミックスチャー（混合）してみた。

エレクトロンのほうが波としての性質を高められるから鮮明になるんだ。それにミクスチャーの割合をリアルタイムに変化させてるから、マルチプレックスタキオンによる妨害も受けにくい。」

「あいかわらず、セイジャさんは、カッコイイです。あこがれます……………」

秋野は、泉の話をちょっと上の空で聞いているようです。

セイジャは、2012年にメジャーリーグに入団したダルビッシュ投手にとってもよく似ていました。紅毛碧眼で身長も190センチメートル以上ありました。若い女性があこがれるのも無理はありません。2019年までの8シーズンでダルビッシュ投手は、すでに120勝以上していたのでそのカッコよさが少しだぶってみえたのかもしれませんが。

「おいおい、僕たちのMIP（Most Important Person）は、アイナイだからね。」

「わかりました……………」

こころなしか、秋野は頬を染めていました。

「アイナイは、やっぱりとても綺麗です、この肌の白さって父親ゆずりですよね……………」

その言葉をうけて、泉 新はあることに気がつきました。

そしてこれは以前、夢の中でも考えていたことです。

「そうだ。わかったぞ。コマチが何かをもっているというのは！」

「泉先生 なにがわかったんですか？」

「秋野さん、君は、いいことをつぶやいてくれた。」

「肌の白さってというのは、遺伝子による部分が大だよ。思い出したよ、モーティベーションコマチというプロジェクトの計画段階で何回かBS（ブレインストーミング）をやってるんだけど、そのなかで、検証方法のBSのときに、遺伝子による検証がいちばん確実だという意見があった。タイムスコープは、あくまでフォトン（光子）による視覚情報のみが伝達できると考えられていたから、物質の伝達を伴う遺伝子そのものは検証対象にならないとされた。でもタイムトラベルが可能なら、たとえばアイナイの髪の毛とコマチの髪の毛を現代に運べば、直系の子孫かどうかは、ほぼ99パーセントの確率で検証できるんだ。」

「泉先生、じゃあ私たちもタイムトラベルの研究をしなくちゃいけませんね。」

「もちろんそうだけど、検証することだけが目的というわけじゃなくなってきたね。」

「と、おっしゃいますと？」

「例の組織が暗躍している理由として考えられるのは、コマチの持つ遺伝子のなかにとっても重要なものがあるということなんだろう。」

「論理が飛躍しすぎていませんか？」

「まあ、半分推理と直感なんだけどね。でも、直感って思ったよりも当たるもんだよ。」

不意に、新のケータイの着信音が鳴りました。

「泉君、面白いものがみつかった。いっしょに行ってみるか？」

それは、海老名教授からの誘いでした。

「先生、なんででしょうか？」

「8世紀はじめの金山跡が見つかったんだ。ちょうど、カイとセイジャが20代から30代のころだと思う。」

「場所はどこですか？」

「秋田県の北部にある鉱山跡だ。」

「わかりました。すぐにまいります。」

泉 新（いずみあらた）は、オペレータの秋野香奈（あきのかな）に指示しました。

「秋野さん、じゃあこのロギングは、サーバーに置いてから音声解析をかけておいて。」

時間は、彼らが海岸を離れるまででいいよ。」

音声解析というのは、かれらのしゃべった言葉をサンプリングしてから内容をテキストとして残しておくことでした。

カイとミマナとアイナイの話す言葉は、原始日本語を基調として秋田弁と渤海語が混じっているのととても複雑で聞き取りにくく言語学者からも注目を集めていました。

「泉先生、わかりました。やっておきます。」

泉 新は、国道7号線を北上して秋田県の北部を目指しました。助手席には、海老名教授が乗っています。

「どういう遺跡なんですか？」

「20世紀の世界産業遺産に登録するためにコオサカ鉱山跡を調べてたんだ。そうしたら、もう何100年も人が入っていないと思われるとても古い坑道が見つかったらしい。」

「コオサカは、銅山で有名ですよ。」

「そう、銅や銀そしてときどき金の鉱脈もみついているね。」

「どうして年代がわかったんですか？」

「坑道の中に使われていた杭（くい）を放射線年代測定したんだ。」

「C14（シーフォーターン）年代測定ですね？」

C14は、炭素の同位元素で半減期が約5700年です。動植物が活着している間は、外界からの炭素を取り込むのですが、死んでからは、体内に存在するC14の量は減っていきます。その量を測定すれば年代がわかるのでした。

現地事務所につきました。所長の大瀧恵一が、出迎えてくれました。大瀧恵一は、海老名教授と同窓で考古学の権威でしたが、新興の考古物理学にも理解を示してくれていて情報をすぐに知らせてくれたのです。

「けんちゃん、ありがとう。いつも助かるよ！」

海老名教授は、大瀧所長と握手を交わしています。

「紹介するよ、彼がうちの新鋭の泉 新君だ。」

「大瀧先生、いつもお名前は伺っております。」

泉 新は、ぺこりとお辞儀をしました。

「君が、泉君か、評判は聞いているよ。僕はなかなか物理考古学会に顔をだせないもんだからね。」

従前からある考古学会では、物理考古学会をいふものと考えている古参の教授たちも大勢いました。大瀧は、それを少しにおわせましたが、本人は意にも介していない様子でした。なによりも赤銅色に日焼けした大瀧は、キャンパスにいるよりもフィールドワークが一番という雰囲気が漂っていました。

「それで、昨日見つけたのが、ある文書（もんじょ）なんだ。」

「読めるのかい？」

「漢字で書かれているんだけど、どうも日本語ではない。といっても中国語でもないんだ。

どっちかというとな高句麗語に近いかもしれない。」

「ということは、渤海語？ってことかい。」

現在の定説はこうです。かつて渤海国が隆盛なときに渤海語が使われていた。ただし13世紀に渤海が消滅したときにその言語も失われた。言語を記述するには、漢字が表意文字として使われたと。そして渤海語は、高句麗語をもとにつくられたという資料もあります。

「もし、本当ならスゴイな。渤海人が秋田にやってきて金山の開発を進めたってことだからな。」

「大瀧先生、実は、もうすぐ”あきたびじょん”で、その確認をする手はずです。まだ、学会に発表していませんが・・・。」

泉新は、思わず口をすべらしてしまいましたが、海老名教授はニヤリと笑いながら、「泉君、きみの奥さんの出番かもしれないね。」

それは、渤海語の解読を頼みたいという意味でした。新の妻、泉ユカは、高校の教員として勤務しながら渤海と日本の交易史を研究していることを教授はよく知っていたのです。

「そうそう、それからちょっと理解できないことにこの坑道跡は、嚴重に隠蔽工作がされていたんだ。それもある程度後世にね。」

泉新は、ちょっと思い当たるところがありました。

「先生、それは、もしかして……。」

新の仮説は、驚くべきものでした。隠蔽工作というのは、目的によって2つの異なった側面を持ちます。ひとつは、当たり前ですが、明らかにしたくないことです。もうひとつは、時が来たときに明らかにしたいときです。

「仮説なんですけど、なんだかメッセージのような気がしてるんですが……。」

「泉君、それはどういう意味だい？」

怪訝（げげん）な表情で海老名教授がたずねました。

「発見されることを前提に作ってあるように思えたからです。」

「そういえば、完全に葬り去るのなら爆破するという手があるからなあ。確かに入り口をわかりにくくしているだけで中の鉱山跡が破壊されているわけではない。」

大瀧所長がつぶやきました。

「じゃあ、誰が何を伝えたかったの？」

海老名教授は、少し視線を下げています。考え事をしているポーズでした。

「もちろん、内容はわかりませんが、いくつかのキーワードがあります。」

「それは、なにかね？」

「ひとつは、金（きん）ですよね。それからコマチ。そしてタイムマシン。」

「なんだかひとつも結びつかないんだが……。」

「僕もどういう説明をしていいか、わからないんですが、たぶん、あの文書（もんじょ）にその答えがあるように思えます。」

「まあ、いまのところ手がかりが全然ないから、泉君の言うとおりの文書の解読をやってみようか。」

とそのとき、ひとりの男が事務所に飛び込んできました。

「所長、なにか変なものがみつかりました。」

「どうしたんだ、服部君。」

服部と呼ばれた男が、手に持っているのは、透明なガラスのようなものでした。直径が10センチメートルの円形で厚みが10ミリメートルほどありました。

「これはなんだろう。ガラスにしては、ちょっと透明度がないね。」

「そうですね。なんだか片面に煤（すす）がついているようです。」

海老名教授がちょっと微笑みながら指摘しました。

「これはねえ、太陽を観測するためのものだよ。」

「わかりました先生。日食の観測に使ったものですね。」

「そのとおりだよ泉君。でも日食だけではないんだ。」

「といますと？」

「黒点活動も観測できたんだよ。」

「えっ！だって小さくて見えないんじゃない？」

「次に、凹面のレンズが見つかると思うよ。組み合わせると、簡単な望遠鏡ができる。」

「っていうことは、なにか白色の紙とかに写しこんで観測してたわけですか？」

「そう、たぶん石灰石の表面を磨いたものが投影版になるわけだ。」

服部が言いました。

「所長、確かに石灰石の板がありました。」

「これは、どういう意味だろうか？」

「何らかの天体现象を観測していたということですか？」

「黒点活動は、11年周期で変化するんだけど、それが地球に及ぼす影響が大きいことはわかっている。」

「金山（きんざん）と黒点ってどんな関係があるんでしょう？」

「今は不明だけど、その辺りが、例の文書にかいてあるかもしれないね・・・。」

「じゃあ、現場に行こうか」

「ありがとうございます。」

3人は、現場用のつなぎに着替え、ヘルメットを着用して現場にむかいました。

この坑道は、麓（ふもと）から沢伝いに1600メートルほど入ったところにありました。普通の沢だと思わせたところが隠蔽工作でした。たぶん、あとで水を引いて沢と思わせたのでしょう。沢歩きをするのは、地元のひとたちが山菜採りのために入るぐらいでした。

今年（2020年）は、上流の川が道路工事のために流れを変えたために沢の水が干上がって誰でも入れるようになっていたのです。

たまたま、資源探査衛星がこの地区の太陽光反射スペクトルを解析した結果、非鉄金属の鉱床があることがわかりました。水が流れなくなったために反射スペクトルの精度が上がったのでした。

三人は、沢を登っていきます。

「所長、資源探査衛星ってどれぐらいの精度なんですか？」

「そうだねえ。やる気になると、1メートル四方ぐらいまでわかるよ。」

「それって、ひとの顔も見えるんですか？」

「そう、使うフィルターを変えるとひとだってことがわかるよ。」

「表面だけみてなんで深いところまでわかるんですか？」

「いい質問だね。泉くん。」

「それは、鉱床の出来かたにあるのさ。」

「とおっしゃいますと？」

「鉱床ができるときは、周りに飛び散りを作るんだ。その飛び散りをみると鉱床があるかどうか
がわかる。」

「泥の中に、石を勢い良く投げ込むと周りに飛び散りができますよねえ。」

「そうそう、いい例えだね。」

そろそろ入口が見えてきました。入口の脇には、プレハブの事務所がありました。簡単な休憩所、仮眠できる場所、トイレとシャワーがありました。もちろんトイレとシャワーは、周囲に環境負荷をかけないようにすべて循環型でした。

坑道の入口は、レンガ造りで高さが1.5メートル、幅が2メートルのアーチ構造です。少しかがんで入る必要がありました。少し進むと高さが3メートルで6畳ぐらいの空間が現れました。

そこから、坑道が3方に分かれています。いまは、外部から仮設電源ケーブルと通信ケーブルが引かれているので照明も充分で電話も使えます。

8世紀ではどうしたのでしょうか。当時は、サザエの殻などに油をいれて乾燥させた木材を芯にして火を灯しそれを灯りとしたのです。

「右から、西坑、南坑、東坑とよんでるんだ。まだ、西坑の第3坑区までしか入っていない。例の文書（もんじょ）は、第2坑区から見つかった。ほかは、換気設備がまだ設置されてなくてねえ。」

「所長、そうすると、まだまだ遺物があるということですか？」

「数日中に、換気設備の工事が入るからそれから本格的な探査ができるよ。」

「はやく見たいものですねえ。」

「エアラインマスクとボンベはあるから短時間なら入れるけどね。」

とその時です。地面がゆっくり揺れ、そのあとに突き上げるような振動が来ました。

地震です。ゴォーっという大きな音と共に3人は、立ってられないぐらいの揺れに襲われおもわずその場にしゃがみこんでしまいました。

数十秒ほどで揺れがおさまりました。内部には、舞い上がったホコリが充満し、何よりも照明が消えて真っ暗になりました。

「教授！所長！だいじょうぶですか？」

泉 新は、ヘルメットにとりつけてあるヘッドランプのスイッチを入れました。内部の様子がぼんやりとわかりました。

「泉くん、そのわきの棚から非常用のLEDカンテラを出してくれたまえ。」

泉がLEDカンテラのスイッチを入れると坑道内は、十分な明るさになりました。海老名教授がちよっと困った口調で呟きました。

「入口が、塞がれた。」

いまの地震で山の斜面から土砂が崩れ入口を塞いだようです。

「助けが来るまでに何時間かかるかな。」

「重機が来るのは、期待できそうにないな。」

「ともかく、今持っているものを並べてみよう。」

3人は、冷静に並べていきました。

「500ミリリットルのペットの水が12本だな。」

「カロリーデイトの缶詰が6個です。」

「水と食料は、3日分だね。」

「酸素はどう？」

「ボンベが6本で3人だと8時間ですね。」

「そうか、酸素はあまりないんだな。」

「測定器類は？」

「酸素濃度計とテスターです。」

「LEDランプ用の電池はどうだい？」

「ランプは、カンテラタイプが2台、単一アルカリ電池が12本ですから、

2日は大丈夫です。」

「そうか、やっぱり酸素が足りないねえ。困ったな……。」

とそのとき、余震がきました。

3人は、すぐに床に伏せました。また大きな崖崩れのような音が聞こえました。

「外は、大丈夫ですかね。」

泉新（いずみあらた）がつぶやきました。

「そうだ、思い出した。ってというか、初めに探さなきゃいけないものがあった。」

大瀧所長が、周囲を見回して、

「これだ、これだ！」

所長が、手に取ったものは、有線電話でした。外部と連絡できる手段として最初に考えるべきものでした。たぶん、3人とも突然の出来事に気が動転していたのでしょう。早速、電話で事務所を呼び出しました。

「あれ！おかしいな。呼出音が無いよ！」

「ちょっとよろしいですか？」

新が、受話器を耳に当てました。

「そうだな、やっぱりだめかな。」

新は、二人に説明をしました。

「土砂が落ちたことによって通信用のケーブルがやられたんですね。」

とそのとき、新は、別のことに気がつきました。

「ちょっと、あることをやってみたいので見ててください。」

泉新は、壁際にかけてられている分電盤のカバーを開けてみました。照明と空調用の電源ケーブルが入っています。新は、胸のポケットからスマホを出して独り言をつぶやきながら、テスターを

電源ケーブルに当てました。

「赤・白・黒の3本と緑色の接地線だな。たぶん三相交流で線間電圧が200ボルトってことか。」

そのあとで、スマホを見たたん、右手の親指を突き上げてちょっと笑みを浮かべました。

「思ったとおりだ。本来200ボルトの電源線を使って5ボルトのモールス信号で通信しようとしてる。」

スマホのアプリは、ある意味のある言葉を表示していました。

「泉くん、何をしているのか説明してくれたまえ！」

海老名教授が説明を求めました。

「ええ、実は、外部との通信ができそうなんです。」

「と言うと？」

「こういうことなんです。」

200ボルトの電源線は、CVTケーブルといってケーブルの被覆に架橋ポリエチレン、外装に鋼鉄が使われています。土砂が落ちた時に、通信線は切れてしまいましたが、丈夫な電源線は生きている可能性が高いと思ったわけです。

じゃあ、外部のスタッフはどう考えるか。電話が通じないとなると、電源線を利用して通信をしようとするはずです。そこで、電源線にテスターを当てたら直流の5ボルトがONになったりOFFになったりするのが見えました。テスターからブルートゥースでスマホに転送してスマホに入れていたモールス信号解読ツールで文字にしたわけです。」

新は、早速、スマホの文字を声に出して読んでみました。

「3人ともご無事でしょうか。こちらの事務所は大丈夫です。土砂崩れで重機は入りません。状況を教えてください。」

1分おきにこの呼びかけがなされています。たぶん、応答があるまで、自動で流しているのでしょう。

早速、新が、外部に返信しました。

「モ・ー・ル・ス・は、苦・手・な・の・で・ア・ス・キ・ー・コ・ー・ド・で・お・送・り・く・だ・さ・い。」

アスキーコードは、通信用の文字コードですが2020年でも使えたのです。新は、内部の状況を知らせました。

「酸素が8時間分なこと、水も食料も3日分しかないと……。」

外部からは、こういう連絡が来ました。

「状況はわかりました。こちらから掘り進むのは、8時間では無理のようです。」

3人は、少し落胆しました。

「でも、トライする手があるようです。ちょっと所長と代わってもらえませんか。」

外部のスタッフ、服部が、大瀧所長とチャットしています。

「所長、この前やってみたMCT（山岳用コンピュータ断層撮影）の結果が来たんです。」

「それで、どんな絵になった？」

「それが、南道を進むと採光口があるみたいなんです。」

「そうか、それは朗報だな。」

「でも、でもですね。そこは、崖の中腹なんですよ。」

「酸素については心配しなくてもいいのか……。」

「所長、でも採光口は、斜め45度の上方についているんで、いずれ二酸化炭素が充満すると危ないです。」

採光口は、山の中腹に掘られる坑道にときどきみられるものです。明かり取りの窓としての役割として重要なものです。本来は、避難口としても使われていましたが、この鉱山では、そういうことはなかったようです。

「僕が、ちょっと確認に行ってきます。ロープを腰に結わえて進みます。なにかあったらトランシーバーで連絡します。」

服部からMCTで作った3Dの地図が送られていたので、採光口までのルートは、だいたい把握できていました。

トランシーバは、スマホをトランシーバモードで使うという意味でした。泉新は、南坑の中をゆっくりと進んで行きました。数10メートル進むと、また広い場所に出ました。ここも休憩所だったのでしょう。ふと見ると、そこに縦30センチ、横30センチ、長さが50センチの木箱が2段積み重ねてありました。とても古いもののようです。手がかりになるかもしれないと上の木箱の蓋を開けてみました。

そして、そこにあったのは、驚くべきものだったのです。

「これは、なんだろう。」

中にあったのは、陶器の壺でした。全部で5本入っていました。壺の口は、蠟（ろう）で封印されていました。

「こちら、泉です。海老名教授、応答ねがいます。」

「はいはい、海老名です。泉くん、なにかありますか？」

「木箱の中に、陶器製の壺を見つけました。どうしましょうか？」

「振って見たかい？」

「やってみます。」

泉新は、壺を一本とりあげて振って見ました。壺を振ったときに、いろいろな情報を収集できます。最初にわかるのは、その比重です。濃硫酸の瓶を振った時は、ズシツとした重さを感じます。比重が1.84もあるからです。でも今回はそうではありませんでした。

「比重は、そんなでもないな。粘度はどうかな。」

壺を傾けたときの、重量の移動を手で感じとりました。

「さらさらした感触だね。たぶん、水かそんなものだな。」

新は、海老名教授にその感触を報告しました。

「じゃあね、1本持って戻ってきて。」

「了解しました。これから戻ります。」

新は、もときた坑道をロープを巻きとりながら戻りました。

「これがそうか。」

大瀧所長がつぶやきました。

「えっ！」

海老名教授が、ちょっと驚いているようです。

「教授、どうかしましたか！」

「えーっとね。これは、青磁四耳壺（せいじしじこ）といって、たぶん高句麗あたりで作られたものだね。口を蠟（ろう）付けしているから、大事なものが入っている可能性が高い。」

「開けてみましょうか？」

「あまりおかしなものは、入っていないと思うよ。」

新は、カラビナにフックした小刀を取り出しました。ざくざくと切り開くと、ようやく栓を引き抜く準備ができました。

「いいですか？」

もう一度確かめました。

「栓を引き抜くのは僕がやろう」

海老名教授が言いました。

「念のために、マスクをしてください。」

それは、有毒ガスが入っているのを懸念したのです。教授は、ゆっくりと口金の周囲を切り裂いていきます、蠟（ろう）の部分は、だいたい切り取ることができました。

次は、栓の部分です。ちょっと力を加えると、木の栓のすきまから”シュー”と中のガスが漏れ始めました。海老名教授は、マスクをちょっとはずして手招きするようにその匂いを嗅いでいます。

。

新と大瀧所長は、2メートルほど離れてその様子を観察しています。

「大丈夫だよ、これは・・・。」

3人はマスクを外しました。

「これは、ワインですねえ！」

思わず、新が叫びました。

「そうだねえ、これはとっても珍しいワインだね。」

彼らが見つけたのは、何らかの果実から作ったワインでした。甘酸っぱい香りが立っています。

「いったい、だれがどういうつもりで置いたのでしょうか？」

「たぶん保管のためだね。坑道の中というのは一年中一定の温度だからワイン庫として使われることもある。」

「置いたのは、大陸と交易があった日本人か、もしくは大陸から来た帰化人かな。」

「泉くん、もう一つ木箱があったということだね。じゃあ、こっちの状況を服部に知らせてから、3人でもう一つの箱を開けてみようか。」

3人は、箱のある場所に向かいました。その箱は壁際に2つ置かれていました。新は、上の箱を脇によけて、2つめの箱の蓋を開けました。

「これは、なんだろう？」

中にあったのは、白っぽい金属光沢を放つ砂でした。箱のなかにびっしりと詰まっています。大瀧所長が、一つまみとって手のひらにのせました。

「元素分析しなきゃ正確にはわからないけど、これは多分プラチナだな！」

「えっ！プラチナですか？」

「ここは、金山じゃなかったんですか？」

3人は、顔を見合わせました。

「あとでじっくりと理由を考えてみようか。」

大瀧所長がつぶやきました。

「おっと、ちょっと寄り道したね。泉くん、この先に採光口があるんだよね。」

「そのようです。じゃあ、ちょっと行ってみましょうか。」

3人は、スマホに表示された3D地図を頼りに進んでいきました。

10分ほど歩くと、また広い場所にでました。

「ここだ、ここだ。」

天井までの高さは、8メートル程でしょうか。見上げると、直径1メートルほどの穴があいてそこから日光が差し込んでいました。穴までの高さが5メートルあります。

「ここから出るのはやっぱり無理か！」

「足場がないとダメだね。」

とそのとき、スマホの呼び出し音が鳴りました。うまい具合に、採光口を通して電波が入感したのです。

「泉さんですか？こちら服部です。所長と代わっていただけますか。」

「大瀧です。おお、服部君か、今、採光口の間（ま）にいるよ。途中で面白いものをみつけたけどそれは後で話す。」

「所長！実は、西坑の一部の壁がとても薄いことがわかりました。先ほどの山崩れで土砂が流れたためです。そこで、発破（ダイナマイト）をかけようと思うんですがいかがでしょうか？」

「そうか！やってみてくれたまえ。」

重機は無理でしたが、発破という手がありました。3人は、坑道の入口まで戻りました。ここでは、電源線を利用して通信ができます。

「それでは、発破まで10秒です、9、8・・・3、2、1 発破！」

にぶい音が坑道内に響きました。

「大丈夫でしょうか？」

外の服部が聞いてきました。

「こっちは、大丈夫だ。これからそちらに向かう。」

3人は、西坑に向かいました。5分ほど歩くと外光が差し込んでいるのがわかりました。ぽっかりと空いた岩の割れ目から、10人ほどが覗き込んでいました。まだちょっと粉塵が舞っています。

3人は、教授、泉新（いずみあらた）、大瀧所長の順に外に出ました。

服部が、駆け寄りました。

「ご無事で何よりです。」

「ありがとう！」

とそのとき、沢の下の方からヘルメットをかぶったユカが登ってくるのが見えました。ユカは、泉 新の妻です。秋北高校で日本史を教えながら、渤海と秋田の交流史を研究していました。坑道に閉じ込められたという連絡を聞いて急いでやってきたのです。

ユカは、新のところに駆け寄ると、

「無事でよかった。ケガはない？」

「心配かけたね。大丈夫だよ、ケガもしてない。」

海老名教授が声をかけました。

「ユカさん、お久しぶり。貴方がたの結婚式以来だね。」

「先生、いつもお世話になっています。」

「今回は、新しく人を、危ない目に合わせて申し訳なかったね。」

教授は、続けました。

「そうだ、今回、坑道からとても面白いものを見つけた。

ひとつは、文書（もんじょ）、それからワイン、あとはプラチナ。

いい機会だから、文書をちょっと読んでみてくれないか？」

「まあ、ともかく下の事務所に行きましょう。」

大瀧所長は、先導にたって事務所に向かいました。

テーブルを5人が囲んでいます。海老名教授、大瀧所長、服部、泉新、泉ユカの順です。

「ユカさん、これが文書（もんじょ）なんだ。」

全体に黄ばんだ紙に墨で漢字が書いてあります。ひと目で古い文書だとわかりました。大きさは、だいたいB5サイズで、15枚ほどです。

ユカは、手にとって一枚ずつめくっていきます。

「ええ、これは渤海語です。漢字で表記してます。」

渤海では、高句麗語を源流とする独自の言葉が使われていましたが、表記する文字は、漢字を使っていました。

「書かれた時期としては、仁安二年という年号が入っているので西暦721年です。これは、一種の手順書ですね。」

「というと？」

「全部解読できないですけど、鉾山から鉾石を採掘してそれを製錬して……。」

「金なのかな。」

「ええ、前半部は、金について書いてますね。えーっと、でも後半部は、白金ってあります。こっちは、川底の砂をあさって篩（ふるい）にかけるとありますね。」

「やっぱり、渤海の技術者が来てたってことだな。」

海老名教授が目を輝かせました。

最後のページをめくった途端、ユカが驚いた様子で呟きました。

「これは、スゴイ発見ですよ！」

「最後に署名があります。祚栄邪（ソエイジャ）と夏壺（カイ）これは、あのセイジャとカイではないでしょうか。漢字自体に意味はありません。音（おん）を表記するのに使ったからです。

」

「真筆（しんぴつ）なら、国宝級だな。」

大瀧所長が呟きました。

「いつもみてるセイジャとカイの实在の証拠がこんなふう目の前にあるなんて！」

泉 新は、とても感動したようです。

「それが、このシミは……。」

ユカが困った様子です。

「ちょっと、見せてみて！」

海老名教授が、手を伸ばしました。

「これはなんだろう。指紋の様にも見える。もしかして、血判か。」

セイジャとカイの他にも、2つ同じようなシミが並んでいます。

「渤海の技術者と日本の受け入れ側ではないですか？」

新が指摘しました。

「とても重大なことが隠されていますね。」

大瀧所長が、頷きました。

「ちょっと気になる記述があるんですよ。」

ユカが文書（もんじょ）6枚目を開きました。そこに墨で四角く囲まれた中に書かれていたのは

、

「このことにより富を得てはならない。将来起こる苦難への備えだ。陽の下（もと）に陰りが見えた時、3つの箱を開けよ。これは、どういう意味でしょうか。」

「えっ！だって箱は2つしかなかったよね。」

海老名教授が、あれっという表情で呟きました。

「ということは、3番目の箱に何があったんでしょう？」

「それは、たぶん……。」

それまで沈黙していた服部が話しました。

「ここは、金山なのです。」

そうか！と、泉新（いずみあらた）は、思わず手を打ってしまいました。

「そうですよね。金の箱があったに違いない。」

じゃあ、誰が持っていったのでしょうか。

新（あらた）は、すぐに思い至りました。

「あの有名な戦国人ですね。」

ユカが、補足しました。

「そう伊達政宗かもしれません。北条攻めをしているときに政宗が屈服の意思を示すために白装束で小田原の秀吉を訪ねたことは有名です。そして、そのときここにあった金を献上したのかもしれない。そのおかげで領地を全部没収されることはなかった。」

じゃあ、なんで他の箱を持っていかなかったのかと泉 新は思いました。

「単に、プラチナ（白金）の価値がわからなかっただけかもしれない。確かにプラチナの融点はとても高いから、当時は溶融することはできなかったからね。」

「ひとまず、研究室に戻って文書（もんじょ）の精査を試みようか。」

海老名教授と新とユカは、大瀧所長と服部に別れを告げ天王市の秋田キャンパスに戻りました。

「これが、ほんとに血判かどうか、生物考古学の椎名助教に鑑定してもらおう。もし血判なら、遺伝子解析でジーン（遺伝子）バンクのデータベースと照合できる。」

2020年には、個人の遺伝子を記録したジーンバンクができていました。将来起こりうる遺伝病について、あらかじめ備えておくことができるようにです。もちろん、とても大事な個人情報なので厳重に管理されていました。

そのなかで、唯一公開されていたのが、遺伝子19B-ガンマです。この遺伝子は、外見を決める遺伝子で19番目の側鎖のなかにありました。使用目的は、IDカード（身分証明書）です。一卵性双生児以外は、同じ遺伝子を持つことがないため究極の識別方法とされました。青葉大学の職員と学生はすべてIDカードを持っています。セイジャとカイの血液中から19B-ガンマの遺伝子が抽出できれば、その子孫の特定が可能になります。

海老名教授は、生物考古学教室に連絡して、椎名助教を呼び出しました。

「椎名くん、学内のIDはどのくらいあるの？」

「約1万8千人ですね。退任された方も含めて・・・。」

「他の大学との連携もとれるのかい？」

「ガンマエリアネットワークに入っている大学だったら大丈夫ですよ。」

「わかった。じゃあ試してみてくださいないか！」

「承知しました。」

椎名助教は、16枚目の血判の部分を大事そうに持ち帰りました。

一方、ユカは、16枚全部のカラースキャンしたデータの解析を始めていました。

とそこに、タイムスコープ”あきたびじょん”のオペレータ、秋野 香奈（あきの かな）がちょっと興奮気味にやってきました。

秋野は、大学院修士課程2年で物理考古学を学んでいました。

「先生、面白いことがわかりましたよ。」

「それは、なにかな？」

泉 新（いずみあらた）は、コオサカの鉱山跡に出発する前に、オペレータの秋野に命じてい

たことを思い出しました。

それはカイ達のしゃべった言葉をサンプリングしてから内容をテキストとして残しておく音声解析でした。彼らの話す言葉は、原始日本語を基調として秋田弁と渤海語が混じっているのでも複雑で聞き取りにくかったのです。

「それが、音声解析の結果に面白い会話があったんです。」

「というと？」

泉 新が怪訝そうな顔で聞きました。

「カイの妻ミナセと、セイジャの妻ミマナの会話です。」

「二人は姉妹だからお互い気安く話せるはずだね。」

「ええ、ミナセが、ミマナに言った言葉の中に、

”チチジャが言った通りになった。西国（さいごく）より長駆の若者が現れてオマエタチの夫となる。”ってのがあるんですよ。」

「それって、すでに知っていたってということ？ あとで運命的な出会いだと思って記憶が固定されたんじゃないの？」

「どうもそうでもありません。”また、チチジャの言う通りになった”という言葉がときどきあるんですよ。」

ミナセとミマナの父親は、エンチュの長のイマキレです。イマキレは、とても才のあるひとで、これまでの行動をみると、天文・気象に通じた学者的な一面ももっていました。たぶんそれが娘たちには、予知能力があるように思った理由だと新は思いました。

翌日、椎名助教が研究室に飛び込んできました。

「海老名先生、泉さん、とっても面白い結果がでましたよ。」

「椎名くん、どうだった？」

「4名の署名のわきにあったシミは、確かに血痕でした。やはり血判だったと思われます。これは、ルミナス反応でわかりました。」

「やはり、そうだったか！」

「それで、ジーンバンクにあるデータベースと照合をかけるために、R-PCR（リアルタイム・ポリメラーゼ・チェーン・リアクション）で遺伝子増幅をかけました。」

R-PCRというのは、ごく少量の遺伝子を増幅させてその性質を調べる装置です。

「1検体に3時間ほどかかったんで、終わったのがほぼ1時間ほど前でした。」

「それで結果はどうだったの？」

「TP-1（テストピース1）のカイは、6 2 ± 3 代前の泉さんの祖先です。TP-2のセイジャは、6 1 ± 3 代前の海老名先生の祖先です。」

椎名助教は、続けました。

「それに……。TP-3は、署名がよくわからなかったのですが、このひともお二人の祖先です。」

海老名教授と泉新（いずみあらた）は、とても驚きました。

「そこまで分かるのかい？どうやって！」

椎名が説明を始めました。

「みなさん、ご存知のように遺伝情報は親から受け継ぎます。その基本情報が一致するかを確認します。一致した場合、受け継ぐ遺伝子配列の変化率が、統計的にわかっています。

ということは、変化した箇所の変異率を計算すると、何代前かどうかわかるんです。」

「なるほど、そうか。つまり遺伝子の中には、カウンターがあって世代を経るごとにそのカウンターがインクリメント（1つ増えること）するようなものか。それにその親からみたら子孫は膨大な数になるね。」

「おっしゃるとおりです。青葉大学関係者18,600人の中に816人のご子孫が確認できました。」

「そんなにいるの？」

新がおもわず声を上げました。

「秋田出身者に限ると3,100人中527人で17%という高率になります。」

海老名教授と新は、顔を見合わせました。

「そういえば、泉くんも秋田出身者か。僕もそうだ。」

確かに、海老名教授も新もどちらかというと色白で長身です。

「TP-3は、もしかしてイマキレ？」

「僕もそう思っていました。」

「さらに、スクリーニングすると男鹿半島の出身者が42%となります。」

「なんだか、感慨深いねえ。」

とそこで、新の携帯電話のSIRIKOがしゃべりました。

「ユカさんより電話です。でられますか？」

「あ、僕だよ。これからこっちにくるんだね。えっ、なんかわかったの。」

新は、妻がくる旨を海老名教授と椎名助教に伝えました。

30分ほどで泉ユカが着きました。

「あ、みなさん、お待たせしました。こんにちは！」

泉 新の他に、海老名教授、椎名助教と秋野香奈がテーブルについていました。

新が口を開きました。

「それで、何かわかったのかい？」

「ええ、14枚目にこんなことが書いてあるの。”いまから1315年後、空に陰（かげ）り見えしとき、3つの箱を使え。”って。」

「721年から1315年後って言ったら、2036年だね。」

「陰りってなんだろう？」

秋野香奈が少し微笑みながら話しました。

「先生、この前、タイムスコープでイマキレをワッチしてたときに太陽の観察をしてましたが関

係ないですか？」

海老名教授が答えました。

「そう！イマキレは、黒点観察をしていたんだ。陰りってというのはこの黒点活動が低下するときのことかもしれない。」

「黒点活動が低下するとどうなるんですか？」

「たしか、気温が低下する方向だったと思う。地球が寒冷化するんだね。それは、黒点活動は1年周期で変化するけど太陽の磁場の反転も同じ周期なんだ。それから、264年周期で4重極構造と言って太陽の磁場の極が4つできる場合がある。このときは、黒点活動の低下で平均気温が下がって小氷河期がくる。この現象は2012年に発見された。その後、4重極がさらに分裂すると16重極になると指摘されている。まだ、観察されてないけどね。」

「16重極になるとどうなるんでしょうか。」

「たぶん、太陽の日射が極端に悪くなって、氷河期が始まることになるだろう。4重極になって8年経つけど、すでに知られているように地球の平均気温は、1℃ほど下がっている。温暖化ではなく寒冷化だね。それから重要なのは、紫外線量が減ることだ。」

「紫外線が減ったほうがいいんじゃないですか？だって、皮膚がんの原因とかにもなるんじゃない？」

「秋野くん、紫外線は人体にとって大事なものを作ってくれる。それは、ビタミンDだ。」

新は、思い出しました。

人体のなかにあるコレステロールに紫外線があたるとそれが変化してビタミンDになる。ビタミンDは、骨や歯の形成に必要なものだ。もちろん食事からもとれるけど、週に2回、5分から30分程度日光浴することで必要な分は生産される。紫外線がなくなると骨や歯が弱くなって生物に大きな影響をあたえるだろう。

「先生、もしかして黄色人種より白人の方がビタミンDの生産効率がいいんじゃないですか？」

「そうだね。10倍ぐらい違うと言われてる。」

「カイとセイジャの子孫である僕たちも効率がいいんですか？」

「たぶん、そういうことだろうね。」

「秋田美人は、紫外線が少なくなってもビタミンDが作れるってことですか。」

「そういうデータもあるようだね。」

そのとき思い出したように、泉ユカが、海老名教授の方に向かって、

「先生、お願いなんですけど、カイの妻ミナセと、セイジャの妻ミマナの写真を見せてもらえないでしょうか。」

「まだ、見たこと無かったかい？ 秋野くん、ちょっとスクリーンにだせるかな？」

秋野香奈が、プロジェクターのスイッチを入れて、「ミナセ」と「ミマナ」とキーボードに入力しました。

ユカがとても驚いた表情になりました。

「どうしたの？」と新が、聞くと、

「あるひとにそっくりだわ……。」

その名前にみなが衝撃を受けました。

「えっ！誰なんだい？」

「小田さんです。」

「どこの？」

「小田摩里亜さんです。」

小田摩里亜は、かつて海老名教授が助教として勤務していた国立横浜大学の研究室にいました。2011年、修士課程の2年でした。博士課程の今給黎（いまきいれ）陽一郎とともに将来を嘱望されていました。彼らは、最先端の歪曲場理論を駆使してタイムスコープ理論をさらに発展させ、ついには、タイムマシン理論を発見します。あとは、タキオンが発見できれば実証実験が可能というところまでこぎつけました。しかし、ここでその発表に待ったがかかりました。時空間物理学会を牛耳っているドンとも言うべき人物が自分の近親者にその研究を独占させ他の研究者を排除したのです。

今給黎（いまきいれ）と小田は、研究室を去りました。その後、ある狂信的な団体の研究部門に所属していたことが警察により突き止められますが行方不明となりました。

「先生、ミナセとミマナの目のあたりを見てください。小田摩里亜さんとそっくりです。」

「そうか、女性の目は鋭いね。確かにそう言われると小田くんと似ているね。」

どうして、そんなことが起こったのでしょうか。泉 新が、ひとつの可能性に気がつきました。

「椎名先生、国立横浜大学は、ガンマエリアネットワークに入っていますか？」

ガンマエリアネットワークは、国内の大学が参加している

ID（身分証明）カード用のネットワークです。

個人の遺伝子のなかでB-ガンマという外見を規定する遺伝子を登録・公開しています。

「たぶん、入っていると思います。」

「ここの端末から呼び出せますか？」

「ええ、私は、アドミニストレータ（管理者）権限ありますから大丈夫です。」

「小田さんのが、残ってますか？」

「ちょっと待ってくださいね。2011年当時だとガンマエリアネットワークの前身でベータエリアネットワークがあったはずなんですけど。」

海老名教授が遮りました。

「当時は、個人情報保護法の第二改正が施行された後だと思う。限定的だけど確かあったような気がする。」

「そうでしたね。じゃあ、確認いたします。」

椎名助教が、端末に入力を始めました。インカム（マイクがついているヘッドフォン）を使っています。

「ベータコード xxxx-xxx 認証コード yyy-yyy」

2011年当時は、音声認識も併用されていたため音声入力も必要だったのです。

「先生、ログインできました。小田さんですね……」

はい、ありました。小田さんのジーン（遺伝子）コード判明しました。」

「じゃあ、青葉大学関係者で秋田出身者とのマッチングを確認してください。」

「えっ！青葉大学関係者ですか？」

椎名助教は、ちょっと驚いた様子で、遺伝子マッチング作業を始めました。

「これは、驚きました。秋田出身者3100人中527人で、また17%です。」

海老名教授が気づきました。

「そうか、泉くん、そういうことだったのか。」

新は、頷きました。

「そうです。ミナセとミマナの母親は、小田摩里亜だったのです。我々の祖先でもあります。」

海老名教授が呟きました。

「ということは、イマキレが今給黎（いまきいれ）陽一郎なのか！なるほど音（おん）が一緒だ。いや、全然、顔が違う。背丈は同じぐらいだったかもしれないが・・・。」

「海老名先生、今給黎（いまきいれ）は研究室を去ってある団体に所属した時に世間を欺くために顔を整形した可能性がありますね。」

そして新は、椎名助教に向かって、

「今度は、今給黎（いまきいれ）さんのマッチングをお願いします。」

「ええ、もう進めています。さあて、ああ、予想通りです。またもや秋田出身者の17パーセントです。」

「そうか、イマキレは、今給黎（いまきいれ）と同一人物で小田摩里亜と共に男鹿半島の西暦690年頃にタイムトラベルしたのか。」

「そして、なんらかの方法でエンチュ（蝦夷）の長（おさ）になった。二人の間には、ミナセとミマナが生まれた。既に、カイとセイジャが、男鹿半島に漂着することも知っていたんだ。」

「でも、西暦690年だで行ったきりで帰ってこれないですね。タイムスコープを作る機材もないし。」

「なんらかの覚悟を持って、その時代に移住したと考えればいいのかも说不定。でもなんのためだろう。」

「それが、例の3つの箱に関係ないかしら。」

ユカが口をはさみました。

とそのとき、コオサカの大瀧所長より連絡が入りました。

「2番目の文書が、東坑より見つかった。これは、すごいぞ。現代語で書いてある。しかもワープロだ。書いたのは、今給黎（いまきいれ）陽一郎という人らしい。」

「すぐに、スキャンしてPDFで送ってくれたまえ。」

海老名教授が依頼しました。

そして、その内容を読んで彼らはとても驚きました。

（第三部 燭光編 了）

【第四部 完結編】

【秋田美人の秘密 第四部 完結編】

1時間ほどで第2の文書（もんじょ）が届きました。

「秋野さん、プリントアウトを配って！」

秋野香奈（あきのかな）は、少し驚きましたがプリンターのスイッチを入れました。プロジェクターと手元にあるPCに映し出して検討をするのが普通だったからです。でも今回の場合は、それぞれ読み進むのが適当と海老名教授が考えたのでした。

海老名教授、椎名助教、泉 新（いずみあらた）と泉ユカに配られました。早速、みなが読んでいきます。

ときどき、「そうだったのか・・・。」とか、「なるほど！」という声が漏れました。

本文の内容は、以下のとおりでした。

「最初に、これをお読みになってるかたにお願いします。この文書に書いてあることは、すべて本当のことと受け止めてください。そして、文末にあるように行動を起こしてください。よろしくお願いたします。

私の名は、今給黎（いまきいれ）陽一郎です。時空間物理の研究者です。自分が経験したことを時系列で記します。年代がときどき飛びますが、これは、いわゆるタイムトラベルを行った結果によるものとお考えください。

2009年、私は、国立横浜大学の時空間物理教室博士課程に入学しました。タイムスコープの研究に従事するためです。当時、タイムスコープは、物理的に実現できる見通しは立っていましたが、エンジニアリング的な落とし込みまでは、まだ至っていませんでした。私は、実際にタイムスコープを運用する際に必要なエンジニアリングの研究を進めていきました。半年ぐらい研究に専心した結果、ひとつひとつ問題が解決され、あとは超光速物質を作る方法だけが課題でした。

私が2年になったときに、小田摩里亜が修士課程に入ってきます。私が指導担当でした。彼女は、とても優秀で3ヶ月ほどでタイムスコープ理論を吸収しました。あるとき、小田が私に話しました。一般相対性理論のチャンドラセカール解を超紐理論（スーパースtring理論）的に式を変形するとタイムトラベル理論ができるかもしれないと。そのときは、半分冗談だったと思って気にも留めませんでした。

その後、私と小田は毎晩遅くまで超光速物質を作る方法について検討しました。そして超光速物質については、超紐理論のコンパクト化により実現できそうだとことがわかってきました。その過程のなかで気がついたのです。小田が言うとおりの拡張ができることを。拡張というのは、タイムスコープ理論からタイムトラベル理論へ発展できるということです。

このことについては、論文にするのが憚（はばか）られました。研究室の大黒教授の恩師は、あの有名な大河内泰蔵先生でした。大河内先生は引退する前に、弟子達を集めて何人かにテーマを割り振りました。その中で大黒先生にはタイムスコープ、そしてご子息の大河内達也にタイムマシンの研究を割り振りました。

このことは、時空間物理学会ではだれでも知っていることで、国内の研究者がタイムトラベルにかかわることは、タブーとされていたのです。

そして、あることが起きました。

私と小田がタイムトラベル研究を秘密裏にやっているというのを大黒教授に通報したものがいたのです。いくつかのメモ書きを見られたようです。いまだに、通報したものが誰かはわかりません。どこの世界にも他人を妬むものはいるということでしょう。

大黒教授は、私たちを呼んで、予想に反してよくやったとねぎらってくれました。早速、論文を書いてもらおう、でもその前にいちばん重要な超紐理論をコンパクト化する式の変形を検証しなくてはいけないね。それを書いて提出してくれたまえと指示しました。

私と小田は、式の変形にかかわるレポートを徹夜で書き上げました。そして、翌日、教授室に行ったのです。しかし、それから教授からは連絡がきません。1週間たってもなしのつぶてです。ようやく10日たって教授が現れました。

先生そろそろ論文に着手してよいでしょうかとの申し出に、その答えは、愕然とするものでした。

”これは、論文にならないねえ、すでに大河内達也先生が気がついていられた。”

私は、やられたと思いました。アイデアの盗用です。大黒教授は、大河内泰蔵先生の指示を守ったのです。

そんなときに、ヨーロッパ連合の研究者からメールが来ました。大学のときに日本に留学していたスイス人で年齢が同じでした。こういうことで憤っていると話をしたところ、もし、君たちさえよければ、こちらで研究する気はないかとの申し出を受けました。実は、CELEN（ヨーロッパ素粒子物理・時空間物理研究機構）という研究機関で超光速粒子の兆候が見つかったためこの検証に研究者を探しているとのことでした。

私と小田は決心しました。その旨を大黒教授に話しに行きましたが、一喝されました。そんなことは許さないと激怒されたのです。そして、私と小田は教授に黙って研究室を去りスイスに渡りました。

一部の研究者は知っていましたが、大黒教授からかん口令が敷かれたようで私と小田はもう存在しないものとされました。その後、ある噂が流されました。私と小田がカルトに入っておかしな研究をしていると。そして日本時空間物理学界から追放されました。

実は、私と小田は、大黒教授に渡したレポートには、トラップを仕掛けておきました。式の変形の途中でハイゲンバッハ変換という操作を行わないと論理式が破綻するのです。変換操作がないと0（ゼロ）で割るということになります。トラップを提案したのは小田です。彼女は少し教授を警戒していたのです。

ヨーロッパに渡ってからは、二人で超光速粒子の検証に没頭しました。そして、ついにその姿

を捉えました。早速、タイムスコープの実証試験装置の設計を始めました。」

新は思いました。伝聞情報は話半分（はなしはんぶん）以下だなど。真実はこうだったんだと。

さらに第2の文書（もんじょ）を読み進めました。

「タイムスコープの検証装置は、スイスにあるヨーロッパ素粒子物理・時空間物理研究機構の中に極秘裏に作られました。超光速粒子の存在は、欧州防衛機構の中で最高機密とされたからです。

タイムスコープで観察できる年代は、電氣的出力が大きいほど過去へさかのぼることができます。通常は、低出力から始めて中出力、高出力と上げていきます。でも、この装置は、最初から高出力の電源が搭載されていました。ヨーロッパの人たちの興味は、やはりイエス・キリストが一番でした。そこで、2000年前まで遡れるように考えられうる最大出力の設計としたのです。

私は、検証を始めました。徐々に年代を遡っていきます。場所をローマに固定して1秒間に1年の割合で遡っていくようにコントローラをセットしました。早送りしたビデオのように風景が変化していきます。そして、17分後1000年前（西暦1010年頃）に遡ると若干画像にノイズがのるようになりました。だんだんと出力も上げていく必要があります。

電源を冷却しているファンの音がうるさく感じられるようになってきました。20分後に1200年前（西暦810年頃）に到達しました。画面の解像度も下がってきました。そして、1400年前（西暦610年頃）になるとデジタル補正も効かなくなり、画面上の情報がほとんど読み取れません。この時点で、試験を終了し問題点を精査しました。検討した結果、太陽風による電磁氣的な擾乱（じょうらん）だということがわかりました。」

ここまで読み進めてきて、今給黎（いまきいれ）さんのグループは、8年ほど進んでいたのだなあと新は、ため息をつきました。イエス・キリストの生涯を探索するプロジェクトはいまでも続いています。

周りでも驚嘆の声が上がっていました。新は、次のページをめくりました。

「太陽風の変化は、黒点活動と密接に関連しています。11年周期で太陽の北極と南極の磁場が反転するのです。このとき太陽風が弱まってしまうので超光速粒子の軌跡に影響を与えます。次の設計に反映する必要があります。この検討の中で、私はあることに気がつきました。太陽風が弱くなることは、地球にとっては太陽熱の輻射が弱くなり、地球の平均気温が下がってしまう可能性です。過去の平均気温について調べてみると264年周期で寒冷期がくることがわかりました。歴史上の飢饉は、平均気温の低下による農作物の収量が減ることによってもたらされます。嫌な予感がしました。予想されるのは、江戸時代の最大の飢饉である天明の大飢饉から264年後、つまり2046年です。その10年前から平均気温は、大きく下がっていくことでしょう。友人のコティに話してみると、とても驚いたように

”ヨウイチ！ 実は、僕も同じように考えていた。太陽活動の停滞期がきて、地球に輻射が来なく

なることを。”と答えました。

コティは、自分と小田をスイスに招いてくれた恩人です。彼は、興味深い話をしてくれました。

”ヨーロッパには、日光浴を尊ぶ風潮がある。それは、太陽の恵みに感謝するとともにビタミンDを体内で生成させてカラダの活力を回復させるからだ。それは、遺伝子的な特性もあるんだ。いわゆる白色人種は、黄色人種や黒色人種より太陽光をうまく利用している。

太陽からの輻射光が少なくなっても生きていけるように細胞自体が違うんだ。それが皮膚の色に表れている。”

であれば、地球が寒冷化したときに生き残るのは白人種かいと聞いたところたぶんそうかもねという答えがありました。現生人種（クロマニヨン人）が残って、ネアンデルタール人が滅亡したのはこの遺伝的特性によるものだということが最近分かってきました。

それは、2万6000年前に小氷期が来たときのことでした。ネアンデルタール人は、現生人類よりカラダも大きく運動能力も優れていましたが、寒さに弱かったのです。その結果、現生人類が生き残ったのでした。

それを小田に話すと、彼女の考えは少し違ったものでした。

”日本人は、氷河期に耐えるように飢餓遺伝子を持っているの。儉約遺伝子ともいうわ。

一日の基礎代謝量が200キロカロリーも少なくても済む。その分、飢餓に強いと言えるわ。”

だとすると、太陽光を有効活用する遺伝子と儉約遺伝子が両方あればベストだよねと私が言うと彼女は、確かにそうだと頷きました。

重要なのは、寒冷化の原因を解析して対策を打つことです。寒冷化の原因は、2011年段階では不明でした。そこである方法を検討しました。

ここで採ったのは、実際に状況を観察するという方法でした。タイムトラベル理論を装置に展開するために、STC（Space-Time Converter：空間-時間変換装置）を新たに開発してタイムスコープに組み込みました。これにより未来に行っているいろいろ調べることができます。タイムスコープは、原理上過去の出来事しか観察できないので、タイムトラベルしか方法がなかったのです。

現在の電源装置の出力から計算すると行ける年代は、25年後でした。つまり2035年ということになります。そして25年後から2010年に戻る際に、そこにタイムトラベル装置がないと戻れなくなります。

そこで、ブーメラン航法をとることにしました。STCから常に追跡用の電磁波を流し、自動的に出発した年代と場所に戻るようにプログラムしました。この方法でも、2035年のとある日の1日つまり24時間は滞在できます。早速、小田と二人で準備を始めました。

ひとつ厄介なことがありました。追跡用の電磁波のチャンネルが、その後開発されるタイムスコープの超光速粒子と干渉して途切れてしまう懸念がありました。そこで、このタイムトラベルの間は、逆位相の超光速粒子を2010年から2035年の間に放つことでその干渉を低減させることにしました。」

新は、おもわず手を打ちました。2035年からの妨害工作のように思えたのは、実は、この

ことだったのか。

さらに読み進めました。

「準備ができたので2035年に向けて出発しました。ターゲットにしたのは、国立国会図書館です。25年後にも同じ場所に存在しているとみただけです。」

STCの中には、座席が2つセットされていました。コティからレシーバに連絡がありました。

”こちらコティ、ヨウイチ！、マリア！。始めるよ……。”

通信は、このときだけです。タイムトラベルが始まると通信が途切れてしまいます。

”洋一郎さん、未来ってどんなものかしら”

”それは、これからのお楽しみだね。”

タイムトラベルが始まると周りが灰色の闇に包まれました。」

新は、ちょっと考えてみました。タイムトラベルというのは、実は、時間旅行だけしているわけじゃない。太陽系自体が高速に移動しているから空間的にも移動しないと何にもない宇宙に放り出されてしまう。高い技術力がないと実現できない。改めて今給黎（いまきいれ）さんのスゴさに驚きました。

「体感的なイメージは、大型バスで高速道路を走っているような感じです。少し微振動はありますが、乗りごごちはそんなに悪くありません。事前の計算では、1年をタイムトラベルするのに1分ほどかかると見ていました。25年だと30分弱で到着するはずですよ。」

灰色の暗闇が徐々に明るくなっていきました。周囲の景色の彩度がすこしずつあがっていきます。到着が近いようです。見覚えのある建物が見えました。東京駅です。赤レンガの壁が堂々とそびえていました。国立国会図書館のある永田町までは、数キロメートルの距離でした。

今回使ったGPSの精度は、128ビットでしたから予測される誤差の範囲内です。

小田に声をかけました。

”カラダは大丈夫かい？”

”ええ、ちょっと船酔いぎみかもしれないけど……。ここは、もしかして東京駅かしら？”

”たぶんそうだね。でも、だれも歩いていないよ！”

私と小田は、座席から降りて、国立国会図書館のほうへと向かいました。

24時間以内にこのSTCの座席に戻ってこなくてははいけません。

そうでないと戻れなくなるからです。

途中誰にも会いません。ひとりこ一人いないようです。

”洋一郎さん、なにが起きてるのかしら？”

不安そうに小田がつぶやきます。

”図書館で手がかりをみつけようか。”

そして、国立国会図書館に着きました。そこで、驚くべきものを発見しました。」

「”肌寒いわ。”と小田が言いました。私は、今は何月だろうとふと思いました。プログラムにセットしたのは、2035年9月上旬でした。体感的には、11月のような感じです。国立国会図書

館に着きました。東京本館です。館内マップを見てから2階の技術・情報室を目指しました。館内の机、椅子、受付カウンターは、少しホコリが溜まってしばらく人が入っていないと見て取れました。

”ここに、端末があるわ。．．．．．、えーっと．．．．．。”

そのとき、25インチほどのELディスプレイが起動しました。

”ようこそ！今日は、2035年9月3日月曜日です。

”画面の中でCGの受付嬢が微笑んでいます。実際の人間と見まごうほどです。

”ご用件をお申し付けくださいませ。”

そうか、これは、音声認識対応の受付さんか．．．！

小田が彼女に話しました。

”質問が3つあります。1つ目は、なぜ人間がいないの？2つ目は、こんなに寒いのはなぜ？3つ目は、だれか、話の通じるひとはいないの？”

受付嬢は、少し考えてから答えました。

”お答えは、あなたのアドレスにメールいたしますか？それとも、生体内メモリーチップにファイルを転送しますか？”

私が遮りました。

”USBメモリーなら持ってきたんだけど、なんならプリントアウトでもいいですけどね。”

”申し訳ございません。USBメモリーは、2022年に紛失防止のため廃止になりました。

それにプリントアウトは著作権を遵守することができないため特別な許可がないとお出しできません。”

”あなたが直接答えてくれないの？”

と少し小田がいらだっています。

”それでは、エーコンシェルに代わりますね。”

画面上は落ち着いた雰囲気のある50代ぐらいの男性のCGに代わりました。

”私がお説明いたします。1つ目のご質問に対するお答えです。簡単に申し上げますと、昨年2034年の10月にCS計画が実行されたからです。CS計画というのは、コールドスリープつまり冷凍睡眠計画のことです。

2024年から太陽の輻射エネルギーが大幅に減少しはじめました。詳しく調べたところ太陽の磁極が16個に分裂したためだということがわかりました。磁極の分裂により太陽内部の高温プラズマ対流の規模が小さくなり外部へのエネルギー放出が従来の半分以下となったのです。地球の平均気温が10℃以上下がり、2045年ごろから小氷河期に入ることが予想されました。そのため政府は、あらゆる対策を検討しました。

最初に検討されたのは、二酸化炭素の排出量を増やして温室効果を強めるという手段でした。でも計算を進めると全化石燃料を燃やしても二酸化炭素の濃度を50パーセント程度あげることしかできません。それでは足りないということがわかりました。

地球外の惑星に移住する計画も考えられ、実際にアメリカの富裕層の中で実行したグループもいました。

最終的に日本政府は、CS計画を選択しました。氷河期の期間が250年から300年間とみなされたためその間冷凍睡眠して、地球が温暖化してから再び目覚めるという計画です。冷凍睡眠装置は、本州にある高山の中腹にトンネルが掘られ、0歳から20歳までの若年層までが優先され睡眠に入りました。21歳以上の国民は、九州と四国、沖縄に移住して静かに暮らしています。全国からすべての食料を集めています。そのため東京にはヒトの姿がないのです。

二つ目の質問には、もうお答えしたとおりです。すでに氷河期の兆候が現れています。三つ目の答えは、沖縄にある日本政府のCS広報室に尋ねられるのがよいでしょう。連絡先は、<http://mail.japan.com> になります。”

私と小田は、とても驚きました。

”じゃあ、睡眠に入れなひとたちはどうなるの？”

小田が思わずうわづった声で聞きました。

”本格的な氷河期は、2046年からとされています。ここまでは、備蓄した食糧で生存が可能と思われます。”

私も聞きました。

”睡眠に入るために必要なことは？”

”冷凍睡眠は、カラダの代謝量を抑えて加齢しないようにするシステムです。体温を3℃程度まで下げること代謝が100分の1に下がります。つまり300年たっても3年しか加齢しません。睡眠に入る前にある遺伝子に働きかける薬品を服用します。減少した紫外線を有効活用する遺伝子と代謝を抑える遺伝子です。この薬品がないと期待した効果となりません。”

”成分は、なに？”

”それは、公開できません。”

”なぜ？”

”政府の決定です。”

新は、思いました。白人の持つ遺伝子と日本人の持つ遺伝子が両方必要なんだと。

自分の子供はどうなるんだろうか。妻のユカは妊娠5ヶ月でした。ということは、生まれた子供は、2021年生まれで2034年に13歳で冷凍睡眠装置に入ることになります。なんとか全員が助かる方法はないものか。

「小田が質問しました。”全員が助かる方法はないの？”

”研究者が鋭意探していますが、現在のところ、見つかっておりません。”」

新は、そのときある可能性に気がつきました。もしかしたらと思いました。あれができれば・・・。

「私は、コンシェルに尋ねました。”タイムスコープ関係の報告書は読めますか？”

”ええ、これまでの歴史とその成果については、ビューアーでご覧になれます。視聴には、3Dスコープを使ってください。”

私と小田は、席を移動して3Dスコープを装着しました。いろいろな情報を得ることができま

した。ときどき思わず喚声のでてしまいました。ある時点で小田が声を上げました。

”陽一郎さん！　もしかして24時間の猶予がないのかも！”

”そうだ、僕も気がついた。ここ10年間の平均気温が低いから滞在時間が減るんだ！”

そうでした。タイムトラベル方程式には、温度項がありそれが10℃以上低いと大幅に滞在時間が減るのです。名残惜しくはありましたが、すぐに戻る決意をしました。

コンシェルに別れを告げて東京駅まで急ぎました。途中、目をこらすと9月だというのに、皇居の方向に紅葉が見えます。あきらかに地球の冷温化が進んでいるのは見て取れました。

急ぎました。予定した滞在時間は24時間でしたが、その10分の1、2時間と30分弱が許された時間でした。

ようやく、東京駅西口が見えてきました。平成の大改修で明治時代の創建当時の面影がよみがえっていました。

”走ろう！”

”分かったわ！”

間一髪でした。もうすでに、スペースタイムコンバータが揺らぎ始めていました。帰還のためのエネルギーチャージが進んでいる状態でした。二人で、座席に飛び乗りました。

そのとき、帰還動が始まりました。みるみる、周囲の景色が彩度を失っていきます。数分でまったく灰色の闇のなかです。小田と私は、話をするともなく30分ほどの小旅行を体験していました。

”お疲れさま、気分はどうだい？”

待っていたのは、同僚のコティとアンニフリッドでした。

アンニフリッドは、コティの婚約者で生物学者としてこのプロジェクトにかかわっています。

”ありがとう。いろいろ貴重な情報があったよ。それに、コティ、君にいろいろ相談がある。”

”わかった。まずはちょっと休んでくれ！そのあと、スタッフ・ミーティングを予定している。”

”そうだね。みんなが聞きたがっているだろうね。”

ミーティング・ルームに移動しました。8人のスタッフとセンター長のディビットが待っていました。

ディビットが口を開きました。

”ヨウイチ！　マリア！　ご苦労さん。僕たちの未来は明るいのかい？”

”ええ、予想したとおり氷河期は来るようです。でも、日本ではしっかり対策をとっていました。コールドスリープです。”

”なるほど、氷河期が終焉するまで冷凍睡眠（コールドスリープ）をとるというわけか。

他の国はどんなのかな？”

”欧米でもその動きがあるようです。白人の持つ遺伝子がコールドスリープには、役に立つと。”

”やはりそうか。大体予想したとおりだ。ヨーロッパ連合でもこの方向性で進むだろうね。”

”でもひとつ問題があるんです。実は、コールドスリープできるのは、20歳までに制限されていました。”

”それは、なんでだろう？”

”紫外線を有効利用する遺伝子を活性化させる薬品が不足しているようです。”

”どんな薬品なんだろう。”

”そこは、開示されませんでした。”

そのとき、アンニフリッドが手をあげました。

”ヨウイチ！ ワタシは、わかったわ！”

みな、彼女に注目しました。

”ずっと、ネアンデルタール人を調査してきたけど、彼らが2万6000年前に姿を消す前に地球の寒冷化に抵抗した証拠が残ってます。それは、白系の遺伝子を獲得しようとしたこと、つまりは、現生人類のクロマニヨン人との混血を進めようとした。そしてもうひとつが、ある種の果実から採った成分を使って寒冷化に立ち向かおうとしたこと。スペインのある洞窟で見つかったんです。それは、数10体分の遺骨でした。驚くべきことにすべての骨に、成長速度が100分の1になった領域があったのです。これは、あきらかに集団で冷凍睡眠を行った証拠でした。その傍らに陶器の壺がありました。その成分を分析したところある種の山葡萄から作ったワインだということがわかりました。そしてその隣にあった容器からは、金の粉末が見つかりました。”

センター長のディビットが尋ねました。

”ワインと金の粉末ってどう繋がるの？”

”金の粉末は、金ナノ粒子コロイドでした。3価の塩化金を還元すると金のコロイドができます。ワインから採った成分と金のコロイドが反応してできた物質を服用すると遺伝子に変異を起こすことがわかりました。金のコロイドは、超微粒子のため表面積がとても大きくなりいろいろ有用な物質をつくることができます。でも、あまりにも反応速度が小さいのです。そんな中で反応速度をあげる物質を見つけたものがありました。その物質は、プラチナ（白金）でした。少しの量を加えることで反応速度を速めることができます。

現代では、触媒と呼ばれています。すでに2万6000年前に、断片的にはありますが、現代の知識に相当するものが現れていたのです。”

泉新（いずみあらた）は、大きく頷きました。これで、ワインと金とプラチナの意味はわかった。あとは、だれがコオサカの鉱山に置いたのか。

「ディビットが聞きました。

”それで、現代でもこの対策が取れるのかい？”

”残念ながらこのワインが採れる葡萄は、もはや絶滅しました。品種改良が進んだためです。”

”どっかにないのかな？”

”1300年前の日本に残っていたという調査結果があります。当時のワインが、日本海沖に沈んだ商船からみつけられました。遺伝子解析により2万6000年前にあったスペインの葡萄から分かれたものだということがわかりました。”

小田摩里亜がつぶやきました。

”私もその話は聞いたことがあります。甲府地方と男鹿半島にあったようです。”

”それだったら、コーフとオガで調査をしてみようか”

センター長のディビットが答えました。

その後、甲府に研究所を作りますが、ある種の妨害工作があり日本の警察からおかしな宗教施設とみなされて放棄することになりました。それも大河内泰蔵先生の差し金だと思っています。

”そうすると、残された人たちを救う方法はないのかしら？”

”ひとつだけあるよ！”と私が答えました。私に注目が集まりました。」

新は、すべてを理解しました。そうか、そういうことだったのか！次を読み進めました。

「私、今給黎（いまきいれ）は、1300年前に行きます。そして山葡萄からワインを作ろうと思います。”

みなが驚きました。そして、センター長のディビットが口を開きました。

”確かに過去へ行くほうがエネルギーは少なくすむが・・・。この領域だとブーメラン航法の圏外になって帰ってこれなくなる可能性が高いな”

”もちろん私も行きます。”

小田が手を挙げました。このころすでに摩里亜とは婚約していました。数年間一緒に研究を続けてきて、お互いにお互いを必要としていることを感じていたのです。私は頷きました。

”ちょっと、ボクを忘れちゃいけないね。”

コティが笑いました。

”ボクは、こう見えても葡萄農家の息子だ。ワインを作らせたら超一流だよ。”

”ワタシも行くわ。”

アンニフリッドも手を挙げました。

ディビットは、腕を額にガンガン当てながら、

”なってこった。好奇心の旺盛なやつばかりだな。・・・よし、わかった。許可する。”

4人は、お互いを見て頷きあいました。

そして、プランの検討に入りました。2人乗りのスペースタイムコンバータは、プロト α 1とプロト α 2の2台がありました。摩里亜と私は、 α 1に、コティとアンニフリッドは、 α 2に乗ることにしました。

西暦700年頃の状況を確認するためにタイムスコープでデクリメントスキャンをかけました。デクリメントスキャンというのは、徐々に新しい年代から古い年代に戻っていくことです。730年にセットして1年を1分かけてさかのぼっていきます。もちろん場所は、男鹿半島です。この行為が予想しない結果を生みました。これまで時間の流れが2つに分かれるタイムディスプレイは、タイムスコープによる観察とは、関連づけできていませんでした。ところが、私が行ったタイムスコープ観察により固定化されたのです。

私はそこに自分の姿を見ました。風貌はちょっと異なっていましたが（この理由はあとで説明します。）確かに私でした。

このことで確信しました。私と摩里亜は、確かに西暦690年ごろにタイムトラベルしてそこで生活を始める。エンチュ（蝦夷）のオサとしてムラを守っている。娘が二人生まれた。ミマナとミマセと名づけた。ある年のこと、西方の海からカイとセイジャという若者がやってくる。

そう、コティとアンニフリッドの息子たちです。彼らは、男鹿半島ではなく対岸の渤海国にタイムトラベルしてそこで生活を始めたのです。カイとセイジャは、ワインの製法と金の採掘方法を男鹿半島にもたらしめます。セイジャとミマナは結婚しアイナイという女の子が生まれます。カイとミナセには、クセリという男の子が生まれました。

そしてその子孫が広まっていったと思います。”

新は、思いました。今給黎（いまきいれ）さんがタイムスコープで自分の姿を確認した瞬間に、このタイムラインが固定された。自分の運命を先読みしたときに人はどんな気分になるんだろう。たぶん彼の場合は、素直に受け入れたんだろうな。それにしても、秋田の白系遺伝子のルーツが、この4人だったとは思ってもよらなかった。それに僕もこの4人の子孫だなんて。秋田美人は、21世紀の人たちから生まれただなんて。

そのとき突然、海老名教授が立ち上がりました。

「みなさん、申し訳ない。これまでみなさんには黙っていたが僕はある妨害工作に加担していた。でもこれを読んで今給黎（いまきいれ）君と小田君にはとても申し訳ないことをしたと思っている。」

「先生、やはりそうでしたか。大黒教授の意向に逆らえなかったんですね。」

「そう、今給黎（いまきいれ）君と小田君は、あまりに優秀でだれも太刀打ちできなかった。そんな嫉妬心もあって僕があのおうさを流したんだ。」

「なんとなく気がついていました。ということは、スプリンクラー事件も先生が・・・。」

「そうだ、すまない。スプリンクラーのバルブ開閉スイッチに仕掛けをした。でも、もう妨害工作はしない。子供たちの未来のほうがもっと大切だから。」

海老名教授は少し、涙ぐんでいたようでした。

「さえぎって、申し訳ない。まだ残りがあるね。」

新は、最後のページを読み進めました。

「私は、タイムスコープで見た結果をコティとアンニフリッドに伝えました。彼らは、微笑みながら握手を求めてきました。

”ボクらは、そんなに近い関係になるのか。感動したよ”

出発にあたり、2つの準備をしました。エンチュ（蝦夷）に溶け込むために顔の整形をしました。そして彼らのコトバを理解するための翻訳機を用意しました。それから彼らのキオクのなかに私と摩里亜がすでにあるように働きかける装置、超小型R-fMRI (Reverse functional magnetic resonance imaging)も手配しました。それからiPAD-thinとインクジェットプリンターを載せました。電源は、スペースタイムコンバータの原子力電池からとれます。

いまは、西暦で言うと725年です。電源はあるのですがもうインクが残っていません。これが最後の文章となります。これを読んでいるわが子孫にお願いします。私は、ワイン5瓶と金、白金を用意しました。あとは、これを反応させて希釈して使ってください。一人あたり10億分の20グラムあれば大丈夫です。全世界の人口がまかなえる量があります。みなが氷河期を乗り越

えることを祈ってペンを置きます。」

今給黎（いまきいれ）さんは、全人類が生き残れるようにワインを残してくれた。この発見によって、新しいタイムラインができた。そして新しい未来が始まる。

新が、周囲をみまわすと全員が読み終えたようでした。

新は、言いました。

”みなさん、早速、政府から金（きん）を返してもらいましょう。あの、大阪城の古い石垣跡から見つかった天正大判金をね。”

ユカがゆっくりと頷きました。そしてニッコリと微笑みました。

（了）

参考文献

新野直吉 著 「秋田美人の謎」 中公文庫

秋田美人の秘密

<http://p.booklog.jp/book/77534>

著者：獅子原じゅべ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/jubeque/profile>

表紙絵：オリヴィア さま（スペシャルサンクス！）

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77534>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77534>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ